
ボンボン=ショコラ ♪

美月みゆん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボンボン〃シヨコラ♪

【Nコード】

N6554D

【作者名】

美月みゆん

【あらすじ】

幼馴染の夕紀はチヨコにとって大事なお姫様だったのに……。凶悪王子と平凡少女のへソまがりラブコメディ 少女マンガ風味でお届けします♪

プロローグ（前書き）

幼馴染の〴〵の1文だけで書きはじめました！

軽いノリで書きはじめたのでお先真っ暗な感じですが
お付き合いいただけたら嬉しいです。

プロローグ

いつも一番近くにいたお姫様。

お人形みたいな丸い瞳であたしをいつも見ていてくれた。

細い腕も、歩くだけでフワフワリと揺れる髪の毛も。

瞬きするたびに垂れるまつげも、小さなかわいい唇も。

全部をひとりじめしてたんだ。

魔法がとけるその日までは……。

ウチの玄関を出て右隣の家の玄関までは子供の足でも1分もかからない。

『島崎』という表札の家も『滝沢』とい表札の家もどっちもあたしの家みたいなものだった。

「おばさん、遊びにきたよ。ユキのランドセル見にきたよ」

ウチよりも広い島崎家の玄関は洋風で幼いあたしには絵本の世界に迷い込んだみたいで嬉しかった。

あの日はあたしと幼馴染のお姫様、ユキが小学校の入学式前に、お互いのランドセルを見せ合う約束をしていた日だった。

「いらっしやい、夕紀なら二階で待ってるみたいよ」

ユキのお母さんはユキと同じで美人だ。

いつも綺麗にお化粧していて、綺麗な服をきていてウチのお母さんとは大違いだった。

あたしはニツと笑うと通いなれた階段を駆け上がってユキの部屋

へ入った。

「おそいよ」

かわいらしいオレンジ色の絨毯の上でユキは寝転がりながら本を読んでいたのか、本から目を離してあたしに向かって口を尖らせた。

「ごめんごめん。お母さんがお手伝いしてから遊びにいけって言うんだもん」

「いつつもそうなんだよね」

ユキは本を閉じるとクローゼットに向かう。

「そんなのより、これ見てよ。かわいいでしょ？　これが一番赤かったの」

あたしはお母さんに内緒でこっそりと持ち出した赤いランドセルを丁寧に絨毯の上に置く。

「わゝ、かわいいね。ユキもね、買ってもらったよ」

「見せて！　見せて！」

小さく飛び跳ねながらユキのランドセルの登場を今か今かと待った。

「重いと疲れちゃうから軽いのにしてもらったんだよ。ほら、これ――」

ユキがそう言ってクローゼットから取り出したランドセルを見て
あたしは目を丸くした。

「ユキ……それ、変だよ？」

「え？ 変じゃないよ？ 一番軽いランドセルなんだよ」

ユキはランドセルに腕を通すと嬉しそうにあたしに見せてくれた。

でも、おかしいんだよ。

だって……。

「それ黒いじゃん！」

あたしの強い口調に驚いたのか、ユキはオロオロとします。

「お、女の子は赤なんだよ？」

「えっ、えっ……。だって……だって……」

泣き虫なユキはすぐに泣きそうになる。

「だってじゃないよ！ 黒なんて男の子のランドセルだよ！」

「そんな……」

ユキがつつむきながら涙をこらえていると、部屋におばさんが入
ってきた。

「あら？ めずらしいね、ケンカ？ あ！ かわいいランドセ

ル。やっぱり女の子はかわいいね」

おばさんは楽しそうにあたしのランドセルを撫でる。

「じゃあ、お願い。ユキのも赤にしてあげてよ」

なんだか悲しくてあたしまで涙目になる。

「やだ、だってユキは黒でいいのよ？ 赤にしたら女の子になっちゃうでしょ？」

おばさんは意味不明な言葉を言いながらあたしの目にたまった涙を拭いてくれた。

「そうだよ……ユキは男の子なんだよ」

ユキが不安そうにあたしの手を握ってきて、そう呟く。

男の子？

ユキが？

あたしよりもずっとかわいいのに？

「オトコノコ？」

あたしの言葉にユキは「うん」と嬉しそうに笑った。

その後の事は記憶が曖昧になっていて、よくおぼえていない。

おぼえているのは。

帰ろうとするあたしの手を泣いてひっぱりながら「嫌いにならな

いで」と何度も懇願するユキの顔と涙。

生まれてからずっとお隣に住んでいたお姫様はお姫様なんかじゃなくて泣き虫の王子様だった。

ただ、それだけのこと。

いつもと変わらない不安そうなユキの顔を見ていたらバカらしくて笑ったのをおぼえている。

だって、いつだってあたしを追いかけてきてくれたのは「ユキ」で大事な幼馴染には変わりはないから。

男の子とか女の子とか。

王子様だとかお姫様だとか。

そんなのは関係ないんだ。

ユキはユキなんだって。

だからその時はずっと仲良しでいられると信じていたんだ。

プロローグ（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。

（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

†あとかきという名の懺悔†

ご来場ありがとうございました！

はじめまして！ 美月みゆんです><

きゃ〜っ、なんかドキドキです！

読んでもらえるかなと緊張しながらアップしてます。

久しぶりに書きはじめたので感覚がおかしいのですが。

短編ばかり書いていたので長編は久しぶりなうえに幸せ♪

文字数を気にしなくていいし、好きなこと書けるって幸せです♪

年末に新年には〜とかって思っていたのが2月になってました…；；；

連載すると時間がガ〜ッてなくなるんでほかの事をやってみました。

HP作成もしたのであとはアップロードしたら完成です><ノ

とりあえず、長編とかいつてますが短めの予定です。

テーマがバレンタインなので出遅れ感ツヨメですね…；；；

しかも、まだ最後まであらずじノートに記入されてなかったり…

…。

どうすんだ？ 私？

さて次回♪ 1 チョコレートと王子様

とりあえず主要メンバー出していく感じで。

ラブコメ、ラブコメ、ラブコメ。

暗示にかけないとシリ阿斯になるかエロになるかの綱渡りです。
もう、王道でいくしかないんですよ。

ベタが一番ですよ。

へっばこなので気合いれてがんばります！

1 チョコレートと王子様（前書き）

お休みの日にしか書くことができないのでノロノロです。
つまみ食い程度で読んでいただけるだけで喜びます。
いろいろ事情があってラブコメ修行中です。

1 チョコレートと王子様

チョコレートなんて。

バレンタインなんて大っキライ！

そもそも、なんでバレンタインになると女の子が男の子にチョコレートをプレゼントしなきゃいけないわけ？

おかしいでしょ？

好きな男の子にはコレでキメる！

な〜んて雑誌のキャッチコピーもコマーシャルもうるさいっての！
あたしはチョコレートもバレンタインも大っキライだ！

バレンタインなんて……。

嫌な思い出しかないんだから……。

滝沢 たきざわ 千代子 ちよこ。

両親からいただいた大切な名前だってことは良くわかってる。
だけど、だけどね。

この古臭い名前のせいでどれだけあたしが苦労したか！

千代子、ちよこ、チョココ、チョココ。

そんな変換をされて育ってきたから、物心ついたときには「チョコちゃん」って呼ばれてた。

チョコちゃんって呼ばれるのは「ちよこ」って呼ばれるよりもずっとマシだよ。

嫌なのは名前の呼び方じゃないんだよね。

「チョコちゃんにはチョコレートだったね」

そんな言葉をたくさん大人の言われてチョコレートを食べてきたもんだから、小学3年の時にはぼっちゃりしちゃってダイエツトしなきゃいけなくなつた事とか。

5年生の時なんかは「チョコ」バレンタインデーの申し子」というまつたくおかしな変換がはじまつちゃって男の子たちに義理チョコをねだられたり。

半分、イジメじゃない！！

それなのに！

その光景を見た近所のおばさん達は、ほほえましい光景をみるかのようにあたしに声をかけた。

「チョコちゃんはバレンタインデーは大忙しね」

そんな何の根拠もない事を近所のおば様方に言われ、それに乗せられた母が動いたのが悲劇のはじまりだったんだよ。

「チョコ、あんたお隣の夕紀君にチョコレート持って遊びにいきなさい」

小学校5年生にもなれば、あたしだって女の子だったからバレンタインデーの意味を知つた。

幼馴染といえども、まして泣き虫ユキが相手だとしてもバレンタインにチョコレートなんて恥ずかしくて母の言葉に猛反発したのをおぼえてる。

だけどこの時、母には悪気なんかなくて、本当に軽い気持ちで言つてたんだろうし、まだ子供、そんな程度の事だったんだと思う。

だからお母さんを責めるつもりはないんだ……。

うちのお隣、島崎さんちの一人息子のユキは年々、かわいらしさに磨きがかかって、すっかり学校でも有名な女子の憧れの王子様へと成長してた。

そんなユキでもあたしにとっては相変わらず泣き虫のお姫様だったし。

いつだってあたしの後を追ってきていた。

仲良しのあたしたちを見て、ユキのお母さんとあたしのお母さんは「お隣同士だしお互い一人っ子だから結婚してくれたらいいのにつてよく話していたっけ。

意識をしていたわけじゃない。

ただ、今思えば、ユキはそういう対象じゃなかったんだと思う。

しづしづ母に持たされたチョコレートをコートのポケットにいたままあたしたち二人はいつものようにユキの部屋で遊んだ。

携帯ゲームを手に二人で笑いながら並んで床に座って。

ポケットの中のチョコレートの事なんかすっかり忘れていつもどおりの時間をすごしていたのに……。

「チョコちゃん、チョコちゃん？ 僕ね、お母さんにチョコちゃんとケツコンしなさいって言われたよ」

「え？」

思わずゲームを落としそうになりながらユキの横顔を見つめた。

ユキは真剣な顔でゲームに釘付けになっていて、あたしの驚く気配なんかそっちのけだった。

あたしの持っていたゲーム機からゲームオーバーのメロディが流

れてきても止めることもしないで眉間に皺をよせた。

お母さんたちの会話の中には時々でてくる性質の悪い冗談をユキ本人が真に受けているとは思わなかったからもあったけど。

なによりも、ユキが本物の男の子みたいに見えて嫌だった。

「ケツコンってパパとママになるってことでしょ？ そうなったらしいよね？」

携帯ゲームから視線をそらしてあたしに笑顔を向けるユキはあたしよりもずつとかわいらしくて何故だか腹が立った。

「ばっばか！ 何いつてるの！ あんなの冗談なんだよ。大人なんて平気で嘘つくんだから！ それに、あたしユキなんかと嫌！」

言ってからしまったと思ったけど、出た言葉は戻せない。

ユキの顔がみるみる崩れていく。

あたしは誤魔化すように笑う。

「う……嘘なの？ チョコちゃんはイヤなの？ えっ！ チョコちゃん僕の事嫌いなもの！？」

今にも泣き出しそうなユキは目に涙をためる。

「嫌いって……そーいう事じゃ……だって、わかんないし……それ……」

あたしの答えを待つようにあたしの顔を食い入るように見つめるユキ。

男の子なのに涙をためて目を潤ませて、まるであたしが悪者みた

いだった。

悪者なんだけど……。

「もーっ！ 嫌い！ 嫌いに決まってるじゃない！」

これはあたしの悪い癖だ。

上手く説明できないと適当なことを言う。

それがどんなに人を傷つける言葉だとしても……。

「嘘……嘘だっ！ 嘘だよっ！！」

いつも優しくて怒ったことなんかほとんどなかったユキが突然、
大声を出したからあたしは驚いて固まった。

涙は消えていて、いつの間にか険しい表情であたしの肩を強くつかんでいた。

「ユ、ユキ？」

「嘘だよね？ 嘘だよねっ！」

その瞬間、いつも女の子みたいだったユキは突然いなくなっている。
て。

必死にあたしの肩を揺らす腕は弱い女の子の腕なんかじゃない。
ふわっと柔らかい笑顔なんかなくて。

あるのはクラスにいる男の子と同じ乱暴な声と険しい顔。

気にもしなかった現実をつきつけられて頭がひどく痛んだ。

やっぱり、ユキは男の子であたしは女の子なんだ。

やっぱり、ユキは泣き虫でも男の子であたしは強くて女の子な

んだ。

浮かぶ思いは怒りに近かった。
本当は悲しかったのだけど。

幼すぎたあたしには複雑な気持ちを言葉にはできなかった。

「う、嘘つきはどっちよっ！」

ユキの体を突き飛ばしながらあたしは怖いと思った。

今までのユキは何だった？

ここにるのがユキ？

「嘘つき！ チョコちゃんの嘘つき！」

突き飛ばされても、あたしに声を張り上げる。

「嫌いって言ったら嫌い！ もう遊ばない！ もう絶交だよ！」

我ながら恥ずかしい記憶だけど。

あれから本当にユキとは遊ばなくなつた。

あたしがユキを許さなかったから。

お隣さんといつても滅多に遭遇することもなかったし、仲良しの幼馴染はいつのまにか学校で時々、見かける程度、バレンタインの時期にだけ少しだけ思い出す程度の存在になっていた。

あれから4年。

お母さんからの情報でユキは私立のレベルの高い高校を目指しているらしいから、中学を卒業したらもつと遭遇しなくなんだろうな。

でも、これで本当にバイバイだ。
幼馴染にだって時効はあるでしょ？

あの時、本当は少しだけ。
ほんの少しだけ後悔したんだよ。

あれからバレンタインがくると胸が痛くなるの。
ユキにあげるはずだったチョコレートを家に帰ってから思い出し
て食べたの。

スーパーで買った4個入りの丸いチョコレート。
いつも食べてるチョコレートとは違う豪華なチョコレート。
それなのに……おいしくなかった。

その日からチョコレートが嫌いになったんだ。
甘かったチョコレートなのに何か違ったの。

口の中にとけたチョコレートは少し苦くて。
胸が痛くて。

何て言えばいいかわかんなかったんだよ。

でも、時効だね。

もう時効。

もう一緒じゃないからさ……。

「わ——っ！ なに乙女ってるのよ！ 勉強！ 勉強しな
きゃ！」

机に伏した体を起こすと頭を叩く。

やっぱ、受験ってコワイわ。

現実逃避が激しすぎだって。

ってか、何年前の話だっていうのよ！

まあ、確かに。

ユキはイケメンに育ったよ。

だからって逃がした魚は大きいみたいに未練がましいな！

あたしには受験よ！

バレンタインデーがなによ！

チョコレートなんか嫌いなんだ！

気合をいれなおして机に向かう。

目の前には真っ白な問題集が広がっていて見た瞬間にへこんだ。

「チョコーっ」

下から母が呼ぶ。

どうせ手伝えとかくだらない事なんだ。

あたしは受験で大変だったの！

無視してペンをとる。

「チョコってば！ あんた勉強なんかしたって出来ないんでしょ
！」

カッチーン！

その言葉に椅子から乱暴に立ち上がる。

「なによ！ そんな言い方ひどいじゃない！」

あたしは怒りをあらわに部屋を出ると階段をドスドスと乱暴にお
りる。

「あたしがどれだけ勉強してると——……」

階段を降りた先にある玄関の人影を見て固まった。

なんで？

どうということ？

母のにこやかな顔の後ろに立つ美少年。

白い肌に大きな目。

サラサラの髪にすっとした鼻。

なによりもオーラが違う。

「チョコちゃん、ひさしぶり」

そう言って笑った顔があまりにもキラキラしててクラクラした。

ユキだ。

本物の島崎 夕紀だ。

あたしは口を開けたまま、なんとかその場に立っていることしか
できなかった。

1 チョコレートと王子様（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。

（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

†あとがきという名の懺悔†

ご来場ありがとうございました！

なんとか2話目？ というか、全然ラブコメ違う……。

やつぱり、あたしに面白みがないからかもしれない。

今からでもシリアスに直したほうがいいのかな。

でも、ラブコメがんばるって決めてたしな。

すんごい軽い話をサーッと書く予定ではじめてから

今更、重い話に変えるのも難しいしな……。……。

更新はカメなのでゆっくり悩むことにします。

さて次回♪ 2 お隣さんは凶悪王子

やつとユキ君の登場で、どうしようかなと困ってます。

乱暴という意味での凶悪ではないので、どちらかというと知能犯的な。

でも本当は主従関係が書きたかった！！ でもそれはマズイ！！

ッてことで、我慢して王子止まりです。

ラブコメ、ラブコメ……ブツブツブツ……。

2 お隣さんは凶悪王子（前書き）

待っていてくれる方がいるのかも謎ですが。

2 話目を更新させていただきます。

面白い面白くないかと言われると

「あんまり……」と泣けてきます。

2 お隣さんは凶悪王子

玄関には爽やかな笑顔とすらつとした長身にお似合いのシンプルなコート姿の美少年。

向かうあたしはルームウェアといえば聞こえはいいがパジャマに毛がはえた程度の姿で無造作に髪をあげて分厚いルームソックスという悲しい姿。

どーすんだコレ!?

そんなあたしの焦りも悲しみもまったく気がつかない母親が嬉しそうに話します。

「ほぐんと夕紀君、ひさしぶりね。かつこよくなっちゃって。これじゃあウチのチヨコなんてダメに決まってるわね」

「おかーさん!」

慌てて止めにはいると玄関に駆け寄ると――ズルッ!

分厚いルームソックスが災いして、あたしは玄関めがけて滑った。

うわああああっ!

絶対、かつこ悪く転ぶ! と思った。

だけど、何かがあたしの身体をグイッと引き寄せる。

あたしの体は間一髪のところ転倒をまぬがれて、まるでゲームセンターのUFOキャッチャーで掴み損ねた人形のようにユキ腕にぶらさがっていた。

た、助かった。

笑われるとこだったよ……ん？　って、あたしは何にぶらさがって……。

まさか、と思いながら顔を上げると幼い頃の面影を残した美少年の微笑みが胸を直撃した。

「あぶなかったね、チヨコちゃん。そんな滑る靴下はいてるから……」

不安定なあたしの体を持ち上げる強い力を感じると、耳元で聞こえる少し高めの綺麗な声があたしの名前を呼んでいた。

懐かしいのに初めて聞いたような不思議な感じ。

4年振りのユキの声は変わらずに優しい声で、あたしに変な期待をさせた。

もしかしたら……仲直りができるんじゃない……。

そう思った瞬間、フワツと体が浮き上がってから子供のように両足を床に着地させるとニコツと優しい笑顔のままでユキが「大丈夫？」ときいてきた。

「平気……」

咄嗟に顔をそらして、あたしはムカムカする気持ちを抑えていた。

なんか……。

めっちゃム力つくんですけど……気のせい？

ほんの数年前までは背も同じくらいだったし、力なんかあたしの方が強かったのに。

涼しい顔しちやって余裕って感じじゃない。

モテるわけですな、ほんとっ！ 腹立つっ！！

「ほーんと、チヨコはドジなんだから！ 重かったでしょ？ タ
紀君は大丈夫？」

「あ……はい」

ユキがお母さんに照れながら小さく頭を下げる。

爽やか全開、王子度アップの姿を目の当たりにしてあたしのム力
ム力は限界点を突破した。

「うるさいな！ もう重くないよ！ いつの話してるの!？」

小学生まではぼっちゃりしてたあたしも、中学にはいるとスリム
になってた。

チヨコレートを食べなくなったのが一番の理由だとは思っけど……。

「ごめんね、チヨコちゃん」

ユキの気弱な声がムカム力する気持ちを揺さぶる。

「あやまらなくていいよ！」

目をカッと見開いてユキの顔を睨みつける。

さつきは顔をそらして見えなかったユキの顔が至近距離にあった。玄関との段差であたしの方が高いはずなのに同じくらいの目線で向かいあう。

数年ぶりに近くで見るユキの整った顔を前に嫌な汗がふきだした。

何、この目！

まつげがバツサバツサじゃない！

何、この口！

ぶるぶるしててフワフワじゃない！

何、この鼻！

自慢じゃないけどあたしはメガネが落ちるくらいに鼻が低いのよ！

あたしの中のムカムカが限界を超えても大きくなる。

膨らむ気持ちをどうにもできなくてあたしは衝動に身をまかせた。

もーっ！

いちいちムカつくのよ！ 泣き虫ユキのくせに！

——ぐにゅり。

「え……」

ユキの眉間に皺ができる瞬間を見た。

それもそのはず。

あたしはユキの鼻をねじっていたんだから。

あたしの中のムカムカはユキの鼻をねじると満足したのか急速に小さくなった。

残された正常なあたしは笑顔をひきつらせる。

な、なんてことを……どうしよう。

絶交なんて恥ずかしい過去から4年振りの会話で鼻をねじるなんて！

あたしつてもーっ！　なんでこうなのよ！
な、何か言わなきゃマズイよ……。

混乱する頭を必死で回転させて唇を動かす。

「……へ、変な顔」

最悪だ。

あたしはありがとうを言うタイミングをのがし、さらに「ごめんなさいを言うタイミングで「変な顔」と言ってしまった。

「チヨコ……あんたって子は……」

さすがの母も驚きすぎて言葉もないらしい。

目の前の美少年は鼻をねじるあたしの手をそつとはずし、それでも笑顔を浮かべる。

そして、視線をお母さんに向ける。

「おばさん、チヨコちゃんは知らないんですか？」

「え、ええ。驚かそうと思って。でも、イヤでしょ？　こんな子」

お母さんは申し訳なさそうにため息をつく。

あたしが知らない？

驚かす？

何の話をしてるのよ??

ユキがここにいる理由?

そつだよ! そもそも、なんでここにいるの?

首を傾げるあたしに二人が視線を向ける。

「え? え? 何? 話がみえないけど?」

「チョコ、実はね」

「いいですよ。僕が話します」

爽やかにそう告げるとあたしのツツコミを待たずにあたしの手をユキがひっぱって二階へあがる。

へ?

な、なに?

子供の頃は毎日のように遊んだ部屋だ。

ユキが忘れるわけがない。

慣れた足取りで二階のあたしの部屋へひっぱられながら向かう。

「ちよつ! ユキ?」

手を引かれながら問いかけるあたしを少しだけ振り返ってユキはニコツと笑った。

「バカなヤツ」

玄関から心配そうに見上げるお母さんには聞き取れないほど小さ

く放たれた言葉はちゃんとあたしに届いていた。

バカなヤツ？

誰が？

っていうか、今のユキが言ったよね？

え？ 何？ なんかキャラ違ってなかった？

「単純っ、笑えるね」

ユキは肩を小さく震わせてクククツと嫌味な笑い方をする。

は？

誰、コレ？

繋がれた手をふりほどこうと力を入れるけれど、ユキはそれを許してはくれなかった。

「は、離して！」

もう一度、手を振りほどこうと力をこめるのにビクともしない。

「だーから、バカだっていつてるの」

ユキは部屋のドアを開けるとあたしを部屋へ引き込む。
そして、静かにドアを閉じた。

「ユキ？ どうしちゃったのよ？」

なんだか様子の違うユキに手を繋がれたままゆっくりと声をかける。

「久しぶりだね、チヨコちゃん」

振り返ったユキはわざとらしく、それでいて嫌な笑いを浮かべる。その時、はじめてユキの変化に気がついた。

「……あんだ、変」

「変じゃないよ、これが普通なの。オレもいろいろ成長したって事？」

「オレって……どうしちゃったのよ」

学校でのユキの噂は聞いていて、とくに変わった噂は聞かなかった。

男の子なのに女の子みたいに優しい言葉使いで儚いキラキラ王子。

「オレ」とか言わないからこそ「王子」だったんだろうし……。

それが何？

「オレ」とか言っちゃうわけ？

夢が壊れるじゃない！

「言いたいことがあるって顔だ。まったく、いつまでも子供じゃないだろ？」

ニヤツと不適な笑顔を浮かべながらあたしの肩に手を置く。

「力も強くなっただし？ 逆転だ、チヨコちゃん」

白い肌に丸い人形のような目、カタチの良い唇。

整った顔は「王子」そのものなのに、何故か意地の悪い顔をして
ゆっくりと顔を近づける。

なっ！ 何する気よ！

泣き虫ユキのくせに。

だろ？ 笑わせないでよ！

何その言い方。

無理して乱暴な言い方したって似合わないっての！

所詮、ユキはユキだ！

今更、何も怖くないっての！

「へ、変な事したら……噛みついてやる！」

キッと睨みつけると、ユキの動きが止まる。

「変なこと？ たとえば？」

ユキはゆっくりと長いまつげを揺らして瞬きをする。

「ふざけんな！ 殴るよ！」

「コワっ！ そんなんじゃ彼氏できないだろ？ あ、もしかして
期待させた？」

目の前にあるユキの顔が楽しむようにニヤリと笑う。

こっ、こいつ！ 楽しんでる！ あたしをからかってるんだ！

「するか！ アホ！」

あたしが精一杯に強がってユキの手を払うと戦闘態勢をとった。

「面白いな。退屈はしそもないな」

ユキの表情の一つ一つがムカムカさせた。

「何しにきたのよ！ あんたとは絶交してるでしょ！」

「あ！ おぼえてるんだ？ 笑える」

「笑えない！ さつさと用件を言って！ あたしは暇じゃないんだから！」

そうだ、暇じゃない。

あたしにはこれからやってくる公立受験が本命なんだから。

「受験だろ？」

ユキは少し離れて腕組みをしながら当たり前のように言う。

「なによ、わかってるなら勉強させてよ」

あたしは右足で床を強く蹴った。

「オレ、本命の私立さ。もう終わってんだよね」

「は？ それで？」

「だから、受験おわってるわけ」

ユキはサラリと言うとあたしの顔をじっと見つめる。

「あ、そ。それ自慢？　よかったね！　おめーっ！　これで見かけることもなくなるね！　あー、よかったね！　これで満足？」

あたしはユキの目を真っ直ぐ睨みつける。

ほんの一瞬だけユキの顔が泣きそうに見えて「ん？」と小さく首を傾けたけど、すぐに小さな疑問なんか吹っ飛んだ。

「ったく、どこまでバカ女なんだよ！」

ユキはうんざりしたような顔であたしを睨み返す。

あたしは口をパクパクと動かすだけで、あまりの怒りで声がでなかった。

バ、バ、バカ女あつ！？

バカ女ってなによ！

「言っておくけど、こっちも遊びに来たわけじゃないんだよ！

おばさんに頼まれたから仕方なく来てやってるんだ！　お前が猛勉強してるけど全然出来てないから教えてやってくれって言われたからな！」

はあ？

ユキに教えてもらおう？

お母さんめ！　余計な事を！

冗談じゃない！

こんな二重人格に、こんな嘘つきゴメンだ！

「じよ、冗談じゃない！　なんでユキなんかに教えてもらわなきゃいけないのよ！」

「しょうがないだろ。お前、塾も行つてないし。今さらはいれないし、このままだと危ないっておばさんが心配してるんだから」

「そ、それは……」

確かに今のままじゃマズイ。

毎日、何時間も勉強してるのにちつとも頭にはいらんないんだ。

「とりあえず、オレも暇じゃないからな。毎日1時間だけ来てやるよ。そのかわり！」

スツと人差し指を鼻に押し当てられる。

「この事は秘密だからな！　友達にも言つなよ」

「なつ、まだ了解してないでしょ！」

「じゃあ、落ちるか？」

厳しい顔であたしにきいてくるユキからは「かわいい」という形容詞はみあたらなかった。

「うつ……」

あたしは言葉につまってうつむいた。

確かに、今のままじゃ……。

こうなったら背に腹は代えられないか……。

「わかった……わかりました！」

顔をあげてまっすぐユキを見て投げやりに叫ぶと、ユキは満足そうに笑う。

「じゃ、明日からってことで。コレ、宿題な」

そう言いながら、持っていたカバンの中から紙の束を出すと机の上に置く。

「宿題？ それ全部？」

あたしの言葉を聞きながら「あたりまえだろ」と笑い、部屋のドアを開ける。

「ちよっ！ 明日までこれ全部なんて無理っ！」

慌ててユキを呼び止めると、廊下に出たユキが立ち止まる。

「じゃあ、チヨコちゃん。また明日くるからね」

そう言って振り返り微笑むユキはキラキラ王子に戻っていた。

「なっ！」

「あ、おばさん。お邪魔しました」

あたしの呼びかけは無視されて、部屋の外にいたお母さんに丁寧にあいさつするとユキは階段を降りていった。

玄関の方からユキとお母さんの話し声を微かに聞きながら、ひとり部屋に残されたあたしは机の上に置かれた問題集の束をつかむと歯をくいしばった。

あんにやる。

やってやるうじゃないの！

なにがキラキラ王子よ！ 凶悪王子の間違いじゃない！

あたしも気が楽になった！

昔のユキはいない、時効とかじゃなくて抹消よ！

あたしは勢い良く椅子に座ると宿題にとりかかった。

2 お隣さんは凶悪王子（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。

（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

†あとがきという名の懺悔†

ご来場ありがとうございました！
ちよつと更新が本当にカメです。

諸事情があつてとてもラブコメなんて書けないので止まりがちです。

でも、がんばって書いていきますので見捨てないでやってください。

私のお話ってつっぱしっちゃって説明不足おおいんですよ……。
つくりこみも弱い感じがしますし。

いや、ツツこんだらきりがなさそうなのでイタイです>>
気の合わない二人つてのも面白いのかなと思って考えたんですけど
書くの難しいですね。

ラブラブのほうがいいかもですね。

もともとヘソ曲がりの女の子と本当は純粋な男の子なのに
曲がってしまった男の子のお話なわけなんです
曲がりすぎちゃったかも……。

さて次回♪ 3 家庭教師は意地悪王子

もうタイトル通りで。

世界観を広げるわけでもなくてお部屋でお勉強。

ただ勉強させるのもつまらないですよね。

でもエロが禁止ですから……ムーッ。

そして例のごとくカメ更新の予定です。

おケツを叩くようにコメントいただけたら嬉しいです。
よーし、がんばろうかな。

3 恋と友情とサイコロの確率（前書き）

意味がわからないかもしれませんが……。

ちょっと暴走しすぎてますが、

甘い目で見ていただけたら嬉しいな……と。（ダメっぷり

3 恋と友情とサイコロの確率

重たい瞼を必死で押しあげ、頬杖をつきながら、ゆっくりと机の上にサイコロを転がす。

サイコロはカラカランと小さな音をたてて2、3回転がって止まった。

「2か……」

小さなため息と一緒にあたしは無意識に声を出すとノートに出た数を書き込んだ。

説明のとおり、あたしはサイコロと格闘中です。

昼休みの騒がしい教室で、周りの楽しそうな会話なんか、まったく耳にはいらない。

集中してるからなんかじゃない。

眠いから！

忌々しい問題集が徹夜しても終わらなかったなんて言ったら。

きつと、ユキのヤツが「根性なし」とか言いだしそう、だから――

意地でもなんでもいいからやってんのよ！

シャープペンシルをギュツと握ると、ふーっと大きく息を吐く。サイコロの二つの黒丸を睨みつけてもう一度、手にとる。

「よお、チヨコ。何やってんだ？」

突然、からかう様な声が目の前から聞こえると、本日、何十回目かのサイコロを転がして、あたしはゆっくりと視線をあげる。

「うわ……。お前、すごいブス顔してるぞ……まさか、寝てないのか？」

日に焼けた肌に細い目をより一層細めた笑みを浮かべてクラスメイトの本多^{ほんた}嵐^{あらし}が驚きながらもあたしの前の席に座り、二人で向かいあう。

「悪い？」

「悪いっていうか……ひどい」

アラシはあたしの顔をもう一度、確かめるように覗き込むとニッと笑う。

「ほつといて。アラシこそ、受験勉強してるの？ ……と、4か」

アラシへの返事もそこそこにサイコロの目をノートに記入する。

「なんだよ、それ数学？ そんな宿題でたか？」

ノートを覗き込もうとアラシのツンツン頭があたしの目の前に近づくと、慌ててあたしはノートを隠す。

「宿題じゃないから」

そう、学校の宿題なんかじゃない。

これは突然あらわれたお隣さんで家庭教師の幼馴染、ユキからの宿題だ。

小さな頃から頭だけはよかったユキ。
今じゃすっかり才色兼備だ。

まあ、今でも運動は苦手なんだろうけど……。

あたしは小さな頃、走っては転ぶユキの姿を思い出しながら、さらにサイコロを振る。

あいつ、サイコロみたいだな。

そうか！ このサイコロをユキだと思えば少しは楽しめるのかも！
ハハハハッ！

ザマーミロ！ 転がして転がして転がしてやるんだ！

「チョコ……顔が怖いぞ？」

アラシの言葉もあたしには届かずにあたしの脳内フィルターで今やサイコロはユキに変化して見えていた。

「ちょっとー、アラシ。あんたからも言っただけでよ」

カラカランと音をたてて転がるサイコロにあわせて、大人っぽい落ち着いた声があたしの背後から聞こえて、その声の主はあたしの両肩を掴んだ。

「お、麻衣。お前でも止められないのか？ コレ」

「止めてるけどやめないの。ずっと朝からやってんの。信じられ

ないって」

小学校からの親友、葛城^{かつらぎ} 麻衣^{まい}はギュツと手に力を入れる。

「イタッ。麻衣、あたしの肩つぶれるって」

「何よ、ずっとサイコロなんかで遊んじゃって！」

麻衣は肩越しにあたしの顔をにらみつける。

長い髪がサラサラと流れるのが目の端にうつると、あたしは小さな声で言い訳をはじめた。

「遊んでるんじゃないんだって……これにはふかい事情ってヤツがあって……」

「コロコロコロコって、もう何百回、転がしたら気がすむわけ？ あたしが話しかけても無視だし。チヨコはあたしの話なんか聞きたくないんですよ」

「そんな〜……麻衣は受験終わってるからいいけどさ〜……」

机の上で空しく数を表示させたサイコロを見つめながらあたしはユキの意地悪な顔を思い出す。

何よ。

眠いのも、麻衣を怒らせてるのも、アラシに笑われたのも。みんな、みんな。

ユキのせいじゃない！

なーんで、あたしがこんな目にあわなきゃいけないのよ！

「なんか、わかんねーけど。許してやれよ、麻衣」

「なんでよ！」

麻衣の棘のある声にアラシが一瞬、ひるむ。

「チヨ、チヨコ……相当、寝不足とみた」

「チヨコが寝不足？」

あたしには見えないけど、きっと麻衣はかわいいというよりは美しい顔を凄ませて壮絶な表情をしているんだと思う。

麻衣はキツイ性格だから……。

案の定、目の前のアラシの顔はみるみる、ひきつっていった。

「ばっ、ばか！ 見てしろよ。目の下にすっぱークマ飼ってるんだぞ！」

あたしの顔を指差しながらアラシは必死に訴える。

その直後、ザワリと背後の気配が動き出す。

背後霊がいたらきつとこんな感じなのかもしれないと思わせる存在でゆっくりと倒れるように麻衣の影が右の頬をかすめると、にゅっとアップの美女があらわれた。

真っ白な肌に赤みがかった唇。

黒くて潤んだ大きな瞳にあたしの顔がうつり、時々まっげでそれは遮られる。

流れるような長いストレートの黒髪に目を奪われる。

現代のお姫様。

校内の王子様がユキならお姫様は麻衣に決まってる。だけど、今はそんなお姫様の顔は悪の文字が浮かび上がって見えるような錯覚を起こしてしまうほどに恐ろしい凄みがあった。

「麻衣……。こ、こわいんだけど……」

横目で睨みつける黒髪長髪の美女は大きな目を見開く。

「あ、ほんとだ。すっごいクマだ」

麻衣は「あら！」と小さく驚くとすぐにニヤツと笑う。
あたしは二人に顔をまじまじと見つめられ、机に伏せた。

「もー、やだ！ 人の顔で遊ぶのやめてよね！」

「なによ、チョコが悪いんじゃない。サイコロとばかり遊んでるんだから」

伏せたまま麻衣の不服そうな声を聞いて目を閉じる。

あゝ……眠い。

もう、寝ちゃいたい！

「ん？ サイコロを投げた時の3が出る確率？ サイコロを5回振って3が出る確率を求めよ」

アラシは「なんだこれ？」とばかりに棒読みだった。

そう！

それなのよ！

確率、確率、確率なのよーっ！

あれ？

ってか……何でアラシがこの問題を？

えっ！！！

頭が急回転を始めて、あたしは勢い良く顔をあげると、目の前にうつる見慣れたノートを広げるアラシからそれを奪う。

「なっ！　なんで見るのよ！」

「わりい、何をそんなになるまで悩んでるのかと思って」

必死にノートを隠すあたしに驚きながらも申し訳なさそうに頭をかくアラシを睨みつける。

「なーに？　サイコロのコロコロ遊びって確率の勉強だったわけ？」

麻衣も驚いたようにあたしの横にしゃがみこむ。

目から上を机から出した状態であたしの顔を見上げる。

「……確率わかんないから」

口を尖らせてノートを抱きしめる。

そんなあたしの姿が二人にどう見えていたかなんてわかんない。だけど、麻衣は嬉しそうに微笑むといきなり抱きついてきた。

「もーっ、それなら早く言いなよ。あたしが教えてあげるのに」

「くっ、苦しいよ」

あたしは麻衣の見た目からは想像できないほど大きな胸に顔を押しつぶされながら、もがく。

世の中、平等なんて嘘ばかり！

どうせ、あたしは脳みそも胸もちっさいよ！

「あのな。サイコロの確率なんて実際に振ったってだめだからな。そんなのテストですんなよ」

アラシは呆れたようにノートを指差す。

ノートに書かれた数字の山を見て、あたしが必死に実践で確率を割り出そうとしてたことを指摘していた。

「なによ、アラシはわかんの？」

やつのことで麻衣の巨乳地獄から抜け出したあたしは息を荒く挑戦的にアラシにききかえす。

「確率ってのはな、必ず出る数じゃないんだぞ？ 簡単に言えば出るかもしれない数一つーことだろ？ つまりだ、出る可能性はどのくらいかを予想することなんだよ。だから実践したって式はでてこねーっての」

出てこない……。

じゃあ、昨日からやってるあたしの努力って……。

「え、つてか式……、式つてあんの？」

「チヨコ……嘘みたいに頭悪いのね」

あたしの言葉に麻衣はケラケラと笑いだす。

「お前さ……教科書、読めよ！ 式でてんだろ？ ったく、しようがねーな。放課後、教えてやる」

「え？」

ぽかんと口をあけるあたしの目の前に真っ赤な顔をしたアラシがそっぽを向いて「受験、落ちたら困るんだよ」と呟いた。

「あ、……え？ なんで？ アラシも受験で大変じゃん。公立が本命でしょ？ あたしならいいから、ちゃんと帰って勉強するし……ん？ 困る？ 困るって何が？」

アラシの言葉の意味が良くわからなくて、あたしは何故だか麻衣に助けを求めた。

「ぷっ！ ざーんねん！ はい！ アラシ退場！ ばいばーい」

麻衣は笑いを堪えながらアラシを前の席から追い出すと、今度は麻衣と向かい合う。

追い出されたアラシは麻衣に文句を言いながらも男友達のもとへ渋々むかっていった。

「なにあれ……変なアラシ」

「ほんと、チヨコって頭悪いね」

麻衣はニコニコと微笑みながらもひどい事をサラリと言う。

「どういう意味？」

「そうだな。確率かな？」

「確率？」

頬杖をついた麻衣が机の上に転がったサイコロを細い綺麗な指で押さえる。

「サイコロの目は1から6でしょ？ チヨコの気持ちは何面あるの？」

「何面って……意味わかんないし」

「まあ、いつか。たとえばサイコロみたいに1から6の数字があって、それが気持ちの大きさだったとしてね。チヨコにとってアラシの数はいくつなの？ 気持ちのサイコロを振って6がでる確率はどのくらいなのかな」と思って」

アラシの数？

気持ちのサイコロ？

気持ちの大きさを数の大きさと考えて？

つまり……それって——……。

「えっ！ 6って、好きって事！？」

「そう」

驚くあたしに麻衣は変わらずニコニコと微笑み続けた。

「ないない！ アラシは友達だよ？」

「ふん。でもさ、いつも友達っていう目がでるとは限らないじゃない？ 確かに1の時もあるだろうし、4の時もあるけど、6だつてありえるでしょ？ 確率はゼロじゃないよ」

「つまりそういう事」って言うとな麻衣は立ち上がる。

そういう事って……全然、わかんないけど……。

これってアラシの事を言ってる？

それとも確率の解説なの？

考えこむあたしに麻衣はニヤリと笑う。

「悔しいけど、アラシの言った事は本当。確率はある可能性を予想することなんだから、実践したって無駄だと思うよ」

麻衣がそう言うとき昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。そして、麻衣はそつとあたしの耳元に唇を近づけるとボソつと耳打ちをして自分の席へ行ってしまった。

残されたあたしはその言葉にしばらく動けなくなる。

チャイムを合図に次々、教室にはいつてくるクラスメイトの中にアラシの姿を見つけ、目が釘づけになって、麻衣の言葉が脳裏にのみがえった。

——今、アラシのサイコロは6だったって事。

それって……。

それって……。

受験生にあつてはならないもので、漫画なんかでよくあるアレですか！？

ええええっ！

アラシがあたしの事をす、す、す、好きっ！？

嘘でしょ？ 勘違いでしょ？

あ、ありえね……。

だって、あたしたち友達じゃん！

あっ、仲間？

もう、なんでもいいっ！

と、とにかく。

落ち着こうね、あたし。

好きとか好きとか好きとかはサイコロの確率とは違うんだし。

あ、でも。

確か……志望高校って同じだったような……。

その瞬間、アラシの照れた顔と「落ちたら困る」の言葉が浮かぶ。

うわっ！

本気？

本気なの？ だとしたら、これってチャンス？

人生初の色恋沙汰に舞い上がるあたしの中からユキの問題集は消え去っていた。

だって、もう。

それどころじゃないでしょ？

いつの間にか眠気は消えて、あたしは鼻息荒く5限目の授業に入
入した。

3 恋と友情とサイコロの確率（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。

（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

†あとがきという名の懺悔†

ご来場ありがとうございました！

うわゝ……本当にカメラ更新に拍車がかかってます。

言い訳してもいいですか？

お仕事から帰宅してご飯を食べて横になる熟睡、そして朝。

これの繰り返しでした。（言い訳にならないいいっ
見捨ててください；；　もうべったりおでこをくつつけて謝りま
す。

週に1回は更新を目指します。

これはお約束いたします。

まあ、信じられないですよね……。

HPもできてないし……3月オープン目指しているのにアヤシイ
です。

しかも！　今回のお話、予告と違いましたよね！

しかも！　王子でてないし！

やっぱり、あらすじノートの当てにならなさは相変わらずです。
そんなダメっぷりですがお許しくださいませ。

さて次回♪　4　家庭教師は意地悪王子

もう次回こそ！

このタイトルで！　王子で！

友情好きな私が寄り道しないように予告いれてるんですが
それでもふらふらっつと友情書いてしまう悪い病気。

恋愛も好きですが友情が好きです。

ところで、ラブコメになってます？

もう、書いてると暴走するのでヤバイです。

でわ！　また5日後くらいに！！

4 家庭教師は意地悪王子

シュツシュツという紙のこすれる音が部屋に響く。

夕食も終わって、本当ならリラックスタイムのあたしの部屋はスパルタ塾が開かれていた。

勉強机の椅子に座ったままの状態であたしの視線はひとつに注がれる。

部屋の中央に置かれたお気に入りの白いテーブル。

買ったばかりのカラーペンを握り締める細くて大きな手。

スツと整った横顔を見せながらユキが無言でプリントの添削をしていた。

お行儀よく正座が妙に微笑ましい光景ではあるのだけど。

数年のブランクがあったからか、ユキの姿は浮いて見えた。

律儀にやってくるとはね。

逃げちゃえばいいのに。

そーいうところは変わってないんだな。

あたしは椅子をクルリと回すと、真っ直ぐ勉強机にむかい頬杖をついた。

それより、ビックリだよね。

アラシがあたしの事をね……。なるほどね。

部屋に漂う異様な緊張感なんかそっちのけで、机に置かれたサイコロを指でつつく。

ふいにアラシの顔が思い浮かぶと顔は自然とニヤけてしまう。

対面にあるカーテンを引かれた窓ガラスに反射した間抜け顔のあたしがうつると、ハツとして顔をひきしめた。

ダメダメ。

今は受験が一番じゃん。

それに、高校だって同じになる予定なんだから焦らなくてね。

あたしとアラシは仲がいいし。

2年生からのクラスメイトだし、なんとなく話も合う。頭の方も同じくらいでお互いにバカにしあうくらいが丁度いい。

まあ、彼氏とか彼女とかってのは良くは知らないけど。

アラシとなら……。――……。

「楽しそう……」

あたしは無意識にそう言っていた。

そんなあたしの独り言を聞かないフリなんかしてくれるほどウチの家庭教師は甘くない。

「何が楽しいって？」

いつの間にかユキが隣に立っていた。

机に置かれた腕が目の端に見えて、あたしは頬杖をついたまま視線をあげる。

たった今、添削の終わったプリントを目の前にバサッと置きながら軽蔑するような眼差しで見据えるキラキラ王子。

「あ、えつと……、お勉強、楽しいな〜って。あ、終わった？
あたしががんばったでしょ〜？ あは、あはは」

自然に言っているつもりでも、ワザとらしく顔がひきつってしま
う。

「がんばった……ねえ。で、楽しいんだ」

少し考え込んでから、ニツコリと微笑みかけてくるユキに、つら
れて微笑んでみせた。

んなわけあるか！

そうは思いつつも笑顔は崩さない。

「た、楽しいよ。だってユキだよ？ と、友達に言ったらみんな
に羨ましがられちゃう。ユキってほら、学校で王子とかって言われ
てるし、こんな状態がバレたら学校中の女子の標的かな〜なんてね」

あたしはうんうん、と頷きながら力説する。

ユキの影が動くと、あたしの肩にそつと手をおく。

「じゃあ、もっと楽しもうか」

少しだけ高いユキの声が低音に変わって耳元をくすぐる。

あたしの右耳から身体の奥にジーンと染みわたるような声に一
瞬、身体がぐにやりと溶け出しそうになる。

やっ！

ち、力がはいらない……。

慌てて耳を押さえるけど、微かにかかった吐息の感触が耳たぶに残ってジンジンした。

「なにするのよ!」

精一杯の反撃は目に力をいれて睨むことだけ。

睨みつけた先には勝ち誇った笑みを浮かべて鼻で笑う王子の嫌な顔。

「それはこっちのセリフ。どうせ、遊ぶことばっか考えてるんだろ」

「なっ!」

うそっ!?
バレてんじゃないか!

あたしは口をパクパクさせた。

「ま、楽しいって言ったんだから覚悟しろよ」

「え?」

「さっそく、楽しんでもらおうかな。特に数学」

「数学……」

笑顔の王子様はあたしの頭をコンコンとドアをノックするように小突く。

あたしは机に置かれた添削済みのプリントをおそろおそろめくる。

「しかし、どうやってこんな回答ができるんだよ。バカか！」

ユキは信じられないとばかりに大きくため息をつく。

めくられた数学のプリントには丸はほとんどなく、はじかれたようなレ点がたくさんついていた。

「基本だろ？ アホすぎ！ バカすぎ！ 脳みそないんじゃない？」

たたみ掛けるようなユキの言葉が降り注ぐ。

「な、何よ……そこまで言うことないでしょ……今日なんてサイコロとどれだけ戦ったと思ってるの！ ユキがこんなむちゃくちゃな宿題だしたから！」

「へー、泣き言？ 情けないヤツ。自分でやるって言ったんだろ？ 脳みそだけじゃなくて根性もないの？」

ユキの冷たい一言に言葉が出なくなる。

「サイコロと戦ってこれ？ 信じられないな。」

「どうせ、ユキとは脳みそのつくりが違っよ。それに……」

「あーっ！ うるさい！ じゃあ問題！ 6がでる確率はいくつだよ」

ユキの声は脅すように迫ってくる。

「6がでる確率……」

突然の出題とユキの荒い声にビクつきながら肩を縮める。

6のでる確率。

サイコロは全部で6面だから……。

昼間、何度も繰り返してやった確立の問題だ。

しかも、この問題は基礎で、ユキは決して意地悪をしているわけじゃない。

だけど、あたしの頭の中は6と聞いて麻衣の言葉を思い出す。

6は好きで、1は嫌い。

その確率は……。

アホーッ！

そんな事、考えてる場合じゃない！

今、まさに、あたしはヘビに睨まれたカエル。

この問題を解かないと何を言われるかわからないんだから。

「えっと、サイコロは1から6までで、つまり、えーっと……」

指を折りながら考え込むあたしにユキは更にため息をつく。

悔しいことに、そんな姿さえも見惚れてしまう。

不機嫌な顔をしていても整ってるんだから、きっと笑ったらもっ

といい感じなのかもしれない。

って、何考えてんのよ！

また余計だつっの！

本当にあたしの頭って雑念の塊だよ。

顔の中心に向けて皺をつくり、ギュツと目をつむる。

「時間切れ！ 基礎が足りなさすぎるんだよ。ったく、がんばるところが検討違いすぎなんだよな……」

怒るわけでもなく、困ったように額に手を当てて、諦めたような声を出すユキにあたしは懐かしさがこみあげた。

な〜んだ、ちつとも変わってないじゃん。

意地悪なんかじゃない。

ユキはこんなだった。

勉強が苦手だったあたしの手を引くように根気強く教えてくれた。九九をおぼえる時もずっと隣で呆れながらも待っていてくれたよね。

『バカなんかじゃないよ！ おばさん！ チョコちゃんがんばってるんだよ！』

小さなユキはいつだってあたしをかばってくれて、いつも優しくったね。

目の奥に映るユキと目の前のユキが重なると、あたしはブツブツと文句を言うユキを遮って口を開く。

「6分の1の確率でしょ」

まるで最初からわかっていたかのように言う。
その答えにユキは驚いたようにあたしを見つめる。

「わかるよ。そのくらいならね。ちょっと、どんな反応するか見てみたかったから」

それは嘘。

ただ、ほんの数秒前に思い出しただけ。

「そういうの時間の無駄って言うんだよ」

悪態をつくユキは小さなユキとはまったくの別人だったけど、あたしには小さなユキが今も応援してくれているような気がした。

「はいはい、がんばりまーす」

「ふざけんな！」

頭を軽く叩かれながらも、あたしは笑った。
そんなあたしにムツとしながらユキは腕組みをすると口の端だけを少し吊り上げる。

「ふーん、余裕だね。じゃあ、間違えたところ直せるよね」

バサリと音をたてて丸のない問題集が目の前に広がる。
ユキの細い指が苛立たしげに1問目を指でつつく。

「え……、これ全部直すの？」

「あたりまえ」

「うそ……無理だし……。あ、ほら！宿題にしてくれてもいいよ」

名案とばかりに目を輝かせてお願いするように「ねっ」とユキを見つめた。

これは子供の頃は有効だったユキを思い通りに動かす方法だった。数年のブランクなんかなかったみたいに普通にできるあたし自身に少し驚いたけど。

「チヨコちゃ……」

悪態をついていたユキも懐かしそうに目を細める。

ほらほら。

ユキはこれに弱いんだから。

やっぱ、幼馴染って不滅なのかな。

なんにしても、偉そうな態度のユキをなんとかしないとムカつくんだよね。

ここんとこ、ビシッといかなきゃね。

「じゃ、今日はここまででいいよね」

あたしがそう言って広げられた問題集を閉じて片づけようとする
と、その手を掴まれた。

つかまれた大きな手から細い指があたしの手を包むと持ち上げる。

「ユキ？」

「バカだね。もう子供じゃないんだからな。——そんな手に
のるか！」

持ち上げられたあたしの手が投げられるように放されると、ユキ
は左手に持っていた紙の束をヒラヒラさせた。

「な、なにそれ……」

恐る恐る問いかけるあたしにユキはニヤリと笑う。

「宿題」

「うそ……」

また……あんなに……。

お前はどこの塾の鬼講師かつての！

「さうで、じゃ、間違えたところ早く直せよ」

絶句するあたしをよそに、ユキは『明日までの宿題』であたしの
頭を撫でるとうしろで読書を始めた。

くそ……っ！

おぼえてろよ！

唇を噛みながら背後で本を読んでいるユキを睨む。

やっぱ、ユキは最悪だ！

なぐにが王子だ！

意地悪王子の間違いだったの！

バーカ！ バーカ！ バーカ！

声には出さずに、唇だけで毒を吐く。

子供じみた反発のしかただけど、こうでもしなきゃ苛立ちはおさまらなかった。

「何やってんだよ！ 時間がないんだからな！ 時計しろよ！」

視線を感じたのか、殺気を感じたのか。

ユキは本から視線をはずしてあたしを睨みつけてきた。

「わかってるよ！」

あたしはペンを握ると、問題集と向き合う。

前方には丸のない問題集。

後方にはキラキラ王子改め意地悪王子が見張っていた。

もーっ、やだ！

こんな事なら塾の方がまだマシだったの！

こんなことなら、ずっと離れてたほうが良かった！

あたしは問いーを読みながらペンを握る手に力をこめた。

4 家庭教師は意地悪王子（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。

（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

†あとがきという名の懺悔†

ご来場ありがとうございました！

信じられないくらいに更新されてなかったですね。

もう見捨てちゃった方も多いのかな……。

いろいろあつて更新が厳しい精神状態です。

ラブコメなんかちつとも笑えないし、気持ちは沈むし。

ダークなお話なら書けたのかもですが。

それでも別の場所で書いている短編もあつて

試作的なこのお話はストップしてたんですが

毎日、葛藤しながらなんとか書きはじめました。

だいぶ間があいてしまったので、どんなキャラだったかが微妙値です。

また、書いていけたらな〜と思いつつ。
精一杯、がんばります！

さて次回♪ 5 キラキラ王子と噂の女

あらずじノートではコレになってました。
ただ、ずいぶん時間がたったので
変更も考えているので（仮）ということで。
次の更新は早ければ今週中にでも。
遅いと……それはもう、怖くて言えないです。

5 ガラスの靴は携帯電話（前書き）

ガラスの靴はお姫様の役どころだろ！

とつつこまれそうなタイトル。

タイトルと人の名前を考えるのは苦手です……。

5 ガラスの靴は携帯電話

びっしりと数式が書き込まれたノートは開いたままだった。
シャーペンを握り締めたままの手が見える。

横向きで机に顔をのせ、脱力状態のままユキの帰りを見送ったのが数分前。

やっと……。

やっと帰った。

何度も！ 何度も！ 何度も！

同じような問題ばかりだし！

本当にしつこい！

あたしはユキの帰り際の言葉を思い出してペンを握り締める。

『じゃあ、オレ帰るな。そうだ、明日、休みだからって遊んでる
なよ』

全てお見通しとばかりにニヤリと笑った顔がムカつく。

昔はあんなじゃなかったのに。

本当にかわいくなかった。

「可愛かったのにな……」

子供の頃のユキを思い出してため息をつく。

握り締めた手から力が抜けると、ペンが支えをなくして転がる。
ゆっくりと転がるペンを目で追う、ペンは机の上に置かれた鏡に

あたって止まった。

「うわ……肌がボロボロじゃん」

鏡に映る、やつれた顔に驚くと頭を上げる。
顔をまじまじと覗き込むと手で頬を撫でた。

「やっぱ、昨日の徹夜かな……。ガサガサだ」

ここのところ、肌のお手入れもしてなかったし。
勉強ばかりで他が見えてなかったかも。

「やだな、こんな酷い顔してたんだ……。つたく、これもみんな

」

鏡に向かって独り言を言い出すと、突然、足元が小刻みに震えた。

ブー、ブッブー、ブブー、ブー、ブッブー、ブブー。

この震え。

この一定のリズム。

そして、この重低音。

よく知ってる音。

携帯のバイブ音。

おかしい……。ね。

あたしの携帯はベッドの上にあるはずだし。
しかも、バイブなんか設定してないし。

鏡に映るあたしの顔が複雑そうに歪む。

そして、何かに気がついたようにハツとして、あたしは面倒くさそうに頭をかく。

やだ、冗談やめてよね。

もし、そうだとしても、知らないから。

あたしはゆつくりと足元へ視線を向けた。

この感じだと、たぶんユキが座ってた場所だ。

椅子をクルリと回すと、あたしは立ち上がり、ユキの座ってたあたりの床を見る。

目に映るのはお気に入りのテーブル……じゃなくて。

その下に転がっている見慣れない黒い携帯電話。

——やっぱり。

嫌な予感は的中。

たぶん、これはユキの携帯だ。

「やめてよね……どうしろっていうの」

もちろん、ユキ本人に届けなきゃなんだってことはわかっている。でも、できたら。

今日はもう会いたくなかった。

肌がガサガサで勉強で疲れきったボロボロの顔に気づいてしまった今日は。

いくら、ガサツなあたしでも誰にも会いたくなかった。

お隣訪問なんて何年ぶり？

ご無沙汰なのに、この顔つてのもね〜。

ん〜、と唸りながら時計を見ると、10時を過ぎたところだった。

久しぶりのお隣訪問がこんな時間じゃマズイよね〜。

迷惑だろうし〜。

「明日でいい、よね？」

いつの間にか静かになった携帯電話に問いかけるように微笑む。

携帯電話相手にアブナイけど、ユキの携帯というだけで恐ろしいもののように見えた。

次の瞬間、まるで催促するみたいに携帯が震えた。

ぎゃーっ！

この電話、怖いんですけど！

あたしは跳ね上がるように立ち上がる。

「あーっ！ わかったよ！ 届ければいいんでしょ！ 本当っ、持ち主そっくりなんだから！」

壁にかけられたコートを急いで着る。

そして、床に忘れられた携帯電話を拾い上げた。

手の中でまだ震える携帯をあたしは忌々しくポケットの中へつつこみ部屋をでた。

「チヨコ？ 何してるの？」

玄関のドアを開けると、廊下を歩いてきた母に見つかった。

「ユキの忘れ物届けてくる」

「へー、なんだかんだ言っても幼馴染なのね。仲直りしてくれてよかった」

こういう時、母親つてのは注意するもんなんじゃないの？ と思
いながら、あたしはお母さんの嬉しそうな笑顔にため息をついた。

「残念だけど、仲直りじゃないし。そもそも、ケンカなんかして
ないし」

イライラする気持ちを抑えながらも子供みたいにお母さんにあた
ってしまふ。

そんなあたしの事がわかってるはずなのに、お母さんはさらに続
けた。

「やだ、お母さんが知らないと思ったの？ ケンカしてたじゃな
い！ あんたが覚えてなくてもお母さんたちは覚えてるんですから
ね！ チヨコがユキ君に絶交なんて言うから、ユキ君が原因不明の
熱出しちゃって1ヶ月も学校休んで大変だったんだから」

え……。

何、ソレ。

ユキが熱？

1ヶ月も学校に行かなかった？

全然知らないし。

あたしは口を開けたまま、玄関に立ち尽くす。

「チヨコは優しくないわね。あの頃はね、ユキ君がかわいそうで見えられなかったんだから。まあ、中学生にもなれば女の子と男の子の差はでてくるから、もう遊んだりはしないんだろうけど、お隣なんだから仲良くしなさいよね」

お母さんはまるであたしが諸悪の根源で、ユキは被害者だったと言わんばかりの言いようだ。

そもそも、本当の諸悪の根源を探せっていうなら、それはお母さん、あんただよ！　と言いたい。

だけど今更、そんな事もバカらしくて説明も面倒だし。

だからこそ！

お母さんには言われたくない！

何が優しくないよ。

あたしが何したっていうのよ。

何にもしてないじゃない！

勝手に盛り上がって、ユキものせられて！

そうだよ！

ハッキリ覚えてるよ！

ユキだって覚えてるはず！

だから、今だって、今だって言える。

「ユキが……」

「え？」

「ユキが悪いのに……そうだよ、ユキが悪いのに！ あたし、行
って来る！」

あたしは勢いよく、家を飛び出した。

「ちよつ、ちよつと！ チョコ！ もうケンカなんかやめなさい
よ！ あんたは女の子なんだから！ 少しは可愛くなりなさいよ」

玄関からお母さんの言葉が響くけど、ドアが閉まると、その声も
聞こえなくなった。

走れば30秒。

お隣のユキの家、島崎家の敷地にあたしは飛び込む。

ドアの前に立つと懐かしい気持ちでチャイムを鳴らした。

5 ガラスの靴は携帯電話（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。

（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

†あとがきという名の懺悔†

ご来場ありがとうございました！

書きはじめて1時間でやっとこのくらい。

そこから読み直して修正したり、加筆したり。

でも、3回も読むとお腹いっぱい、もうポイッてしたくなりま
す。

そこが私の悪いところなのかもしれません。

少し寝かせて読み返して、直せばもう少しマシになるのかな。

しかし……いつも書いてて思うのは。

私のお話って面白くないんですよね。

ユーモアのセンスがないので笑えないし……。

やっぱり才能とセンスの問題なんですかね。（泣

ま、別にいいんですけどね。

楽しく書ければ！

お仕事も楽しい時期突入で

次の更新も謎ですが早めにかんばりますね♪

やっとノツてきた感じ？

さて次回♪ 6 王子が幼馴染にもどる時

あらずじなんかポイツです。

面白くないから。

更新の間隔が広いので変な感じですが

実は、まだ数日しかたってないんです。

でもって、次はスパルタ塾1日目の夜なんですよ。

もともと、1週間くらいのお話の予定だったみたいで

展開が細かくて早いのであらずじはポイすることの決定しました。

また組直しします！

でわ！

6 王子の秘密と島崎家の人々（前書き）

おはようございますーす。

同タイトルで1と2みたいに分割しようかと思ったんですけどやめました。

で、別タイトルになってますが、内容は7話につづく……みた
いな。

6 王子の秘密と島崎家の人々

オレンジ色の外灯で照らし出される洋風のドアの前。

チャイムを押して、すぐにインターホンから懐かしい上品な声が「どちらさま？」と尋ねてきた。

「あ……、おばさん。千代子です」

『えっ！ チョコちゃん？』

プツツという音声の途切れる音がして会話は切断される。

久しぶりに聞いた島崎のお婆さんの声に緊張しながら目の前の扉が開かれるのを待った。

——カチャッ。

ゆっくり開く扉から眩しいくらいの明かりに目を細めると、あたしの目の前に島崎家の懐かしい玄関があらわれる。

ラベンダーの香りが鼻をくすぐって、いろんな思い出が溢れてきた。

毎日のように行き来していた場所。

絵本の中にでてくるような手作りのお菓子。

ユキの部屋の大きな本棚。

二人でよく寝転びながら絵本を読みあつた気持ちのいい午後。

おでこがぶつかる程に体を寄せて、あたしたちは幸せの中にいた。

「チョコちゃん！」

扉が開ききると突然、中から甘い香りと一緒に抱きつかれる。

「わっ！」

あたしの体が思わず後ろに倒れそうになるのもおかまいなし。

「本物のチヨコちゃんだわ！ パパ！ チヨコちゃんよ！」

「本当！？」

バタバタとした足音と耳元で聞こえるテンションの高い声にあたしは懐かしさで思わず笑ってしまった。

「おばっ、おばさんっ！ く、苦しいから！」

「あ、やだ！ ごめんなさい」

少しでも体に覆いかぶさるものが力を緩める。

隙間から顔を出すと、懐かしい二人の顔が変わらずにあった。

ここ数年、まったく顔を合わせることもなくなった人たち。

家族のように小さな頃からたくさんの愛情をくれたユキの両親。

「おばさんもおじさんも、相変わらずパワフルすぎ」

とてもウチのお母さんと同じ歳とは思えない美女が目を潤ませてあたしの顔を両手で撫でる。

おばさん、相変わらず綺麗だし。

おじさんも「おじさん」って言うのが悪い感じ。

「パワフルにもなるでしょ。こんなに、チョコちゃん綺麗になつて……」

「おばさん、大げさだよ。褒めすぎ。あたし普通だよ」

普通かどうかは謎だけど、綺麗とは言われたことないもんね。それに、ユキの方があたしよりもずっと美人だよ。

なんて言葉は飲み込みつつ、あたしは島崎のおばさんのハグから逃げ出せずにいた。

「そんな事ない、綺麗になった！こんなに可愛くなって……、ねえ？ パパ」

「うん。女の子は変わるね」

「ほらね！ もう！ チョコちゃん、チョコちゃん、チョコちゃん。あーっ、チョコちゃんだ」

もう一度、ギュッとキツく抱きしめられるとあたしは「死ぬ！」と心の中で叫びつつ、人形のように動けなくなっていた。

その時――。

「何やってんの？」

瞬間冷凍。

空気が凍るって、こういう感じなんだと思う。

無我夢中であたしの体を拘束していたおばさんの動きが止まった。そして、無音の張りつめた空気。

「お、ユキ。めずらしいお客さんだぞ」

重たいような息苦しい沈黙を破るおじさんが、声の主の名前を呼ぶ。

「見ればわかるよ。だから、何って聞いてるんだけど。特に、このオバサン」

「オバサンって、ユキちゃんに言われたくない！ ママでしょ！」

一度、急降下したテンションが急上昇したようなおばさんの声が耳に響く。

「いくつだと思ってるんだよ。いい加減、大人になれよ」

おばさんの腕の隙間から見えるユキは呆れながら目だけで笑う。

「チヨコちゃん、なんでユキはこんなに可愛くなくなっちゃったのかな」

「さ、さあ……」

たぶん、可愛くないのは家でだけだと思うけど。なんてったって、学校じゃ王子だし。

おばさんの肩越しにユキと目があうと、あたしはワザとらしく笑ってみせた。

ユキは眉間に皺をよせてあたしを睨みつける。

「で、チヨコちゃん、どうしたの？」

「え、ああ。忘れ物を……じゃなくて！ ちょっと話が」

「こんな時間に？ 面倒だな……。ま、じゃあ入れば？ 外でいつまでも、うちのおばさんの人形になってるのも嫌だろ」

ユキは手まねきすると、そのまま階段をあがっていく。

「あ！ ちょっと待ってよ！」

叫んで手を伸ばしてみたけど、ユキの姿は視界からきえた。

くそ~~~~~っ。

手招きするくらいなら待てっの！

「何やってるの？ はオマエだろ！ って感じね」

あたしの体から腕をはずして、島崎のおばさんは呆れた声をだす。それから、あたしの背中を押すように家の中へ入った。

「ママは騙せないんだから」

「おばさん？」

さつきからブツブツと聞こえてくる島崎のおばさんの言葉が理解できなくて首をかしげた。

おばさんはクスクスと笑うと、おじさんと目で会話して、今度は

ふたりで笑い出す。

「な、なに??」

「ごめんね、チヨコちゃんの事じゃないからね」

おじさんがそう言うてから、笑い続けるおばさんに「ほら」と言う。

あたしは何がなんだかわからずに靴をそろえて階段へ向かった。

でも、すぐに「待って」と呼び止められる。

「ユキの事、許してね。冷たくしてるわけじゃないから。ちょっとバカなの」

バカ……。

それはヒドインじゃ。

階段下の真剣なおばさんの顔に、あたしはつつこむ事もできずに言葉を失ってしまった。

「たぶん、今。部屋ですごい緊張してると思うから」

おばさんはニツコリと微笑むと「行ってみて」と続けた。

「まさか～。ユキが緊張? 想像できないな」

「じゃあ、チヨコちゃんにとっておきなヤツを教えてあげるよ。」

ユキは今ね、部屋の壁にもたれて足を伸ばして座っているはずだよ」

「は？ おじさん？ なにそれ」

「あの子はね、なんでも要領良くできるんだけど、1つだけ上手くできない事があって、その事で考え込んだり、落ち込んでる時は必ずそうなんだよ」

おじさんは「秘密だよ」と人差し指を立てて唇にあてる。

夫婦そろって似たもの同士なのか、息子を心配してというよりは好奇心でいっぱいといふ可笑しそうな様子だ。

「よくわかんないけど、あたしもこのままじゃダメだと思うし、ちよつと体当りしてきます。遅すぎかもだけど……」

あたしは小さく頭を下げると階段を一気に駆け上がった。

階段下から二人の興奮したような声が聞こえてくる。

「ユキが緊張ね……ありえないし」

あのキラキラ王子と凶悪王子の二面性を持つユキだもん。

緊張したフリはできるだろうけど、本当の緊張なんて絶対しないように思う。

まして、あたし相手に……。

あたしは小さく笑って、廊下のつきあたりの部屋の前に立った。

6 王子の秘密と島崎家の人々（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。

（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

†あとがきという名の懺悔†

ご来場ありがとうございました！
うつつ。

書く時間がないっ！！

とんでもない事にやつと半分つてところで、終わらない。
パパパツと書いて、10日かそこらで終わらせようと思ってた予定が

狂いに狂って今、現在。

ありえないし！

4月にはいったら続編に取り掛かろうと思ってたのに
できなーいっ！

続編の粗文はできてるのに……。

ダブルで書くななんて器用な事はできそうにないし……。
早く終わらせないと……。

とにかく、がつ、がんばりますっ！

さて次回♪ 7 王子が幼馴染にもどる時

ノロノロ更新デス。

ここらへんからちよつと進めていけるかなと。
なんていうか、前置きが長い……。

でも、動き始めてくれればサツサツかな。

後半はドタバタしちゃう感じになりそうだし。
とろろり感是最初だけの予定です。

7 王子が幼馴染にもどる時？（前書き）

方向があつちこつちに定まらないのは

私の脳内がいろいろ考えすぎてるせいなんです。

なんで、今回、なんだかクールというよりは鬼畜な感じの王子です。
（ごめんなさい……）

こんな中学生男子いないよな……。……。

7 王子が幼馴染にもどる時？

コンコン。

習慣になっていないノックという行為が、緊張を高まらせる。

最後に、この部屋の扉を開けた時は、今よりずっと子供だった。

毎日、笑って過ごした部屋が、目の前にある。

あの日まで、幸せがそこにあった。

大切なものが、確かにあった。

数年ぶりに来た島崎家は、あたしの中にある思い出の風船をいくつもわる。

その度に、怒りは薄れて、喪失感に胸が痛んだ。

バカじゃん。

あんなに仲良しだったのに……。
すごく大事なモノだったのに……。

ユキは覚えてるかな？

あたしは、今でもはつきりと覚えてる。

お母さんたちの冗談交じりの会話と、ユキの言葉。

あの時、何かが変わっていく感じがして怖かった。

ただ、仲良くしていたかっただけ。

ただ、笑っていたかっただけなのに。

あたしは、部屋の中から返事を待たずに、ドアを開けた。

以前、そうしていたように。

——ガチャ。

最初に目に映ったのは、懐かしい大きな本棚だった。

「この本棚、まだあったんだ」

ユキの姿を確認もしないで、あたしの視線は本棚に集中していた。子供の頃はものすごく大きかった本棚が今では最上段も踏み台なしでいけそうだ。

「あ！ アルバムじゃん！ ねえ、これ見ていい？」

右斜めうしろに、何か異様な気配を感じて、あたしは振り返る。きちんと片づけられた部屋の隅、壁に寄り添うようにユキはいた。

ユキを見たあたしの口から思わず「あ、本当だ」と漏れる。

「は？ 何が？」

不満そうに視線だけ上げて、まるで糸の切れたマリオネットみたいに、だらりと手足を床につけて、ユキはあたしを見る。

その姿は確かにおじさんが言ってた通りで、壁に寄りかかり、足を伸ばしきっていた。

あたしは半分、呆れながらユキに近づく。

「ほんと、相変わらずだね、何よ、この部屋。男の部屋じゃない

いね。神経質なところ、変わんないんだ」

あたしはぐるりと部屋を見ると不敵に笑う。

「なんだよ、こんな時間に、それも勝手に入ってきて。お前みたいな非常識なヤツに言われたくねーよ」

「ほー、そんなに冷たくしていいと思ってるの？ 信じらんない。あたしが来た事を感謝してよね」

ユキの子供みたいなお態に、にやけながら、あたしはポケットから携帯を取り出し投げた。

おじさんの話を聞いたせいだろうか？

今のユキは小さなユキと同じに見えた。

本当は何も変わってないのかもしれない。

あたしの中に何故だか、嬉しさがこみ上げていた。

「その携帯がしつこくブルブル震えるから届けてあげたんだから」

投げられた携帯を上手にキャッチしたユキは「あ」と短く驚いてから、もう一度あたしを見上げる。

「届けるため？」

信じられないというような顔でユキは小さくきいてきた。

「な〜に？ 今更、そんな優しい声だしても遅いつての！ さっきはあんなに強気だったくせに〜」

そう言いながら、スツとユキの目の前にしゃがむと、顔を近づけた。

「な！　なんだよ！」

目の前に近づけるあたしの顔に驚いたのか、ユキは壁に張りつくように逃げる。

「ねえ、ユキは変わっちゃった？」

「は？」

壁に必死で手をくつつけながら、顔を横へそむけるユキ。

ゆっくりと這うように顔を近づけるあたし。

傍から見れば襲っているようにしかみえない。

「あたし、ずっと引つかかっている事があって、ずっと、ユキに会うのも、この家に来るのも嫌だった」

「だろうな」

ユキの低い声にもめげずにあたしは続ける。

「だけど、もう嫌。面倒じゃない。隣に住んでて、いつも気にしてて、それに、あれって子供の時のことだし、もう忘れない？」

「はあ？　そんな前の事、なんで今更、言うんだよ」

「だから、嫌だから！　勉強、教えてもらえるのすごい助かる。」

だけど、このなんていうかぐにゃ〜とした、ジメジメ〜とした感じが嫌なの！ 今さらだけど、でも、あたしは気にしてたんだと思う」

いつの間にか、気がつけば、必死で顔をそむけていたユキは真っ直ぐにあたしをみつめている。

ユキの長いまつげが瞬きの度に揺れるのがよく見えた。

「それで？ どうして欲しいわけ？」

「仲直りしよう！ もう、前みたいにはいかないだろっけど。仲良くはできると思うよ」

あたしの言葉にユキはキョトンとして、でも、すぐに小さくため息をついた。

「強引。つか、自分勝手」

ふいつと横を向くユキに、あたしはさらに近づく。

「なによ、じめ〜っとキノコがはえたみたいになってるよりマシ！ 男らしくないよ！ 男なら細かいことでグダグダしない！ 本当、ユキは相変わらず女々しいんだから！」

あたしはふんつと鼻息荒くまくし立てるとニツと笑った。

次の瞬間、ユキの整った顔がこれまた見事に悩殺スマイルをつくりだす。

——ぎゅっ——

目の前でこの笑顔はキツイ。

不覚にもドキツとしちゃったよ！

本当、男にしとくにはもったいない顔してるよ。

「降参。その男らしさは変わらないね」

「じゃ、じゃあ。幼馴染、腐れ縁のお隣さん同士ってことで！」

スクツとその場に立ち上がると、あたしは一步後ろへさがり、チラリと見えた本棚のアルバムに手をのばす。

「そだ！ アルバムでも見る？ なーんてね、時間が遅すぎか」

ハハハとあたしの笑い声が情けなく聞こえる。

「そんなに見たい？」

ユキの顔が真顔になる。

ほんの数秒だと思うけど、ユキの視線から目がそらせないでいた。

な、なに？

なんなのよ、無駄にキラキラしやがつて。

落ち着け！ 落ち着けあたし！

「古き良き時代っていうの？ 振り返りながら思い出を語りたいじゃない。まあ、原点から再出発って感じ？」

あたしは慌てて、手に取ったアルバムを開いて、無理矢理にユキの前に置く。

開かれたアルバムには小さなユキとあたしの写真が貼られている。公園で遊ぶ二人。

一緒におやつを食べる二人。
お昼寝をする二人。

そのどれもが懐かしい。

「本当にいつも一緒だったよね。うわ、何コレ！」

開いたページ、1枚の写真を指差す。

『はじめてのおつかい』と題された写真には、幼い頃の二人が手をつないで泣いていた。

「ひつどい、こんなヒドイ写真が残ってるなんて」

「あー、それってチヨコちゃんが道に迷ってドブに――」

「ストップ！」

ユキの口からおぞましい思い出が全て吐き出される前にあたしはその口を押さえていた。

「あにっ！ もごっもごっもごっ……」

あたしは手のひらでユキの唇の動きを感じながらも押さえ続けた。

まずい。

ユキと話すってことは、昔の事とかをバラされちゃうかもしれないんだ。

それって、それってかなり危険！

あたしはゴクリと唾を飲み込むとユキをにらむ。

「ねえ……ユキ、学校で昔の話なんかしないでよね」

口をふさがれたユキは抵抗をやめて、目だけで笑う。

「学校で話しかけるのはナシにして！ あたしがいても無視して、いい？」

そつと押さえた手を離す。

「いい？ わかった？」

ユキは無言でニヤニヤするばかりだ。

「わかったかって聞いてんの！」

「いいよ。今まで通りだろ？」

やけに素直に応じてくれるユキを疑いながらも、あたしはホッと息をつく。

「そのかわり、さ」

そう続けたユキは寄りかかっていた壁から体を起こして、あたしの方へ近づくと、そのまま、あたしの体を床に倒した。

「わっ！ 何すんのよ！」

立場逆転。

さつきとは反対に、今度はあたしが押さえ込まれる。しかも、口なんかじゃなくて体ごと！

「ねえ、チヨコちゃん。前にも言ったけど、オレって男なんだよ？ どうせ今でも、女みたいだとか、かわいいとか、思ってるんだろうけど。ちゃんと男なわけ」

押し倒された状態で見上げるユキは確かに男だった。

細い腕からは想像できない力にどうすることもできなくて、あたしは悔しくて睨みつけることしかできなかった。

まるで4年前の繰り返し。

その時、あたしの頭の中に、小さかったあたしの想いが溢れ出す。

男の子のユキはキレイ。

だって、ユキが男の子だったら——だもん。

あれ？

ユキが男の子だと何だっけ。

ユキは女の子だって思っていたかったのはなんでだっけ？

「チヨコちゃん？」

「あ……」

「こわいの？」とユキはふんつと鼻で笑うと、ゆっくりと顔を近づける。

な、何する気？

まさか！

キキキキ、キスしようとしてる？

ユキがあたしに？

嘘でしょ！？

バカじゃん！

まずいって！

絶対、まずい！

何がまずいって……まずくないような気もするけど。

何かちつがーうつー！！

あたしは最後の抵抗とばかりに、比較的、自由のきく足をバタつかせた。

「バカーっ！ 冗談やめてよ！ 何考えてんのよ！」

あたしは大声を上げながら、もうダメだ！ と顔を左右に振る。

「別に減るもんじゃないし」

「減る！ 減るにきまつてんでしょ！ それに！」

あたしは間近にせまったユキの顔を止めるように言う。

「こーいうのは違うでしょ！ 好きな人とするもんで、遊びでするもんじゃないでしょ！」

次の瞬間、ピタッとユキの動きが止まる。

目の上、2センチの距離にあるユキの大きな瞳があたしの視線と

あわさる。

「ま、さか。あたしの事、好き……なの？」

自分で言っただけで恥ずかしさで顔が熱くなる。

何の根拠もない疑問。

ああーっ！ 恥ずかしすぎて消えてしまいたい！
なんてことをきいてるのよ……。

ユキだっけからかって楽しんでるだけなんだから。

「——キライだよ。チヨコちゃんなんか大嫌いだよ。それに、こ
んなの冗談に決まってるだろ？」

笑いもしないで、まっすぐにあたしを見下ろしたまま、ユキは言
う。

思わず、驚くのを隠せなかった。

ヤダ……。

何だろう。

わかってたのに、胸が痛い。

ただ、ユキは男だっけ事を証明したいだけで、こんな嫌がらせを
してただけ。

そんな事、なんとなくわかってたのに。

「好き」なんて気持ちはないのは同じなのに。
はつきりとした言葉が胸にささる。

「え？ 好きだっけ言っただけなの？ ずっと想ってたみたいなの？」

意地悪なユキは綺麗な顔でサラリと言う。

あたしは閉じた唇を震わせながら、耳の奥から目の中心にかけて熱くなるのを感じていた。

そして、抑えきれなくなった力を込めて、膝を振り上げた。

もちろん、あたしの膝は見事にユキの急所へヒット。

「うがつ！」

変な声を発して、ユキは転がる。

あたしはその隙に立ち上がった。

「ふざけんな！ バーカ！」

あたしは力いっぱいドアを開けるとそのまま一目散に家へ走った。

やだよ！ あたし、絶対にユキを男の子になんかしてあげないの！
だって、ユキが男の子だと——だもん。

幼いあたしの声が頭に響く。

そして、胸の痛みが広がるのと一緒にあたしの視界は歪んでいった。

7

王子が幼馴染にもどる時？（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。

（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

＋あとかきという名の懺悔＋

ご来場ありがとうございました！
すっごいヤバイです。

春には続編書こうとおもってたのに、書いてないし。
これも終わってないし。
マイペース、カメラ更新。

読んでくれる人がいることが奇跡なお話になりつつあります。
アレの続編は夏になるのかな〜と遠い目をしてしまいます。
1日が48時間ならいいのに……。

さて次回♪ 8 お姫様になれる呪文

ご指摘があったので、予告内容変更〜。
ついでに次回タイトル変更〜。

シャワーあびてて、やっぱりもう一話追加したほうがいいかなと
急遽、粗文を考えます。（これから！

奇跡の読者がいることを知ったので
気持ちを新たにがんばりますね！（カメラのは変わりませんが……

次回は回想の予定です。

思い出を書こうかなと思います。

またいきあたりばったりで、おかしい文章を追加してしまったので
ふくらんじやいました。

でわ！

お気を長くおつきあいくださいませ。

ご苦情、ご感想、お待ちしております。（どんなのもドーンとこ
いです！

8 お姫様になれる呪文（前書き）

寝ずに書き上げたのはいいけれど、
更新までする力が残ってなくて、今頃更新！

次回更新はいつもより少しだけ早くできそうです
♪

8 お姫様になれる呪文

大きく深呼吸をすると、あたしは両頬をパチンと叩く。

「ただいまー！」

大きな声を玄関に響かせて、何事もなかったように靴を脱いだ。

「あーら、誰かと思ったらウチの不良娘じゃない。遅い時間に家を飛び出しておいて、なんだかずいぶんと平気な顔して帰ってきちゃって」

玄関にあらわれたお母さんは腕組みをして顎をあげる。

「うるさいな。どうせ、島崎のおばさんから電話きてるんでしょ。本当、嫌な感じ」

「うわ、八つ当たり？ その様子だと、夕紀君に逃げられちゃった？ 情けないわねー、お母さんの若い頃なんてね」

ほら、始まった。

あんと違ってかわいらしくてね、男の子にモテモテだったのよーでしょ？

「あんと違って——」

はあ……。

耳にタコだよ、お母さん。

あたしはお決まりの出だしにうなだれる。

「もー、うるさいな。逃げられたとかじゃないから！　そもそも、ユキは幼馴染でしょ！　た、だ、の！　幼馴染なんだからね」

「やだ、本当、チョコってかわいくない」

あたしの言葉に落胆するように、お母さんはため息をついて、つまらなさそうに肩をおとした。

「かわいくなって結構です！　お母さんたちが無理矢理おかしな方向に仕向けてるんじゃない」

「えー、女の子はかわいいほうがいいに決まってるでしょ。それに、夕紀君だって――」

「あーっ！　もう！　ユキ、ユキ、ユキって、勝手にユキとどうこうしないでよね！　あたしにだって選ぶ権利があるっての！」

いーっと白い歯を見せると、あたしはお母さんの横をすりぬけて階段をあがった。

「贅沢もの！　何が選ぶ権利なの！　生意気言っんじゃないの！」

階段下でお母さんが捨てゼリフのように叫んでいる。

わかってるよ。

そんな事、あたしが一番わかってる。

あたしはユキに選ばれなかったんだから。

頭が良くて、顔もいい。

学校では女子1番人気、まさに理想の王子様。
小さい頃のユキがそのまま大きくなったなら……。

本物の王子様になったかもしれない。
でもね……。――

あたしもそうだけど、ユキもずいぶんとひねくれちゃったよな。

あたしは部屋のドアを開けると、真っ先にベッドの上に倒れこむ。

「昔はかわいかったのに……」

ベッドの心地よさにあたしはゆっくりと目を閉じた。

昔だつたらあたしを選んでくれた？

胸にチクリと痛みが広がる。

それから逃げるように、あたしは睡魔を受け入れる。

あ、寝ちやいそう……

宿題……今日の分、まだやってないや。

またユキに怒られちゃう……。

いつか……。――、どうせ、もう……。来ないかもしれないし。

――キライだよ。チョコちゃんなんか大嫌いだよ。

なによ。

ふざけるなつての。

あたしだって、あんたの事なんて嫌いなんだから。
ずっとずっとキライなんだから……。

「——キライ！ もーやめた！ 見つからないんだもん！」

「えー……だって、チョコちゃんが最初に見つけようって言ったんだよ？」

暖かい日差しの中。

一面に広がるクローバーの中、二人で座る。

あれは確か、幼稚園の時だ。

まだ、ユキを女の子だと信じていた幸せなとき。

絵本の中にでてくる四つ葉のクローバーの本物が見たくて、二人でこっそり近くの空き地へ出かけたんだった。

色素の薄い髪の毛を揺らして、ユキは困った様に笑っていた。

「じゃー、もうちょっとだけだよ、ね？」

「うん！ ありがとう、チョコちゃん」

ユキの笑顔にあたしは、弱かった。
かわいいユキを、誰よりも大事にしてたのは、あたしだったのか
もしれない。

結局、長い時間をかけても四葉のクローバーは、見つからなかった。

ユキが納得するまでと、後半は四葉探しはしないで、虫を観察して遊んでいたあたしは、暖かな日差しが翳りだすと、ユキに声をかけた。

「ユキ、やめようよ。帰ろう?」

振り返ると、ユキは、背を向けてしゃがんでいた。

「ユキ?」

もう一度、声をかけると、ユキはくるりと振り向いて、あたしの頭の上に何かをのせる。

「え?」

「四葉のクローバーはあげられないから……かわりにね、あげる」

クスクスと嬉しそうに笑うユキは幸せそうに手を叩く。
あたしは慌てて、頭にのせられた物を取る。

「これ……ユキがつくつたの?」

「うん。花の冠だよね。これも本にでてたでしょ?」

クローバーの花で作られた白い冠。
ふわふわとした可愛い花の冠。

「でも、ユキのほうが」

あたしが、ユキの頭に冠をのせると、まるで絵本から飛び出した
お姫様みたいに見えた。

「ダメダメ。チョコちゃんのほうが似合うよ」

ユキはそう言うと、またあたしの頭に花冠をのせた。

「ほらね。やっぱり！ チョコちゃん、かわいいね」

可愛いユキが微笑みながらあたしを「かわいい」と褒める。

ユキの方が絶対に似合ってたし、可愛いのもわかった。
だけど、嬉しかった。

あの一瞬、あたしはお姫様だった。

あの時だけ……ね。

本当、なんで今さら、こんな事を思い出しちゃうのかな。
嫌いって言われたから？
何か期待してた？

まさか。

違うよね、たださ、本当にね。

お母さんに言われるまでもなくわかってるんだよ。

「どうせ……かわいくない……よ」

夢の中で言ったのか、本当に声をだしたのか不思議な感覚の中であたしはつぶやいた。

「——かわいいよ」

答えるように遠くで聴こえる優しい声。

あー……、ユキの音がする。

これって、まだ夢のつづき？

あのまま、仲良しのまま成長してたら、こんな風に優しく言ってくれたのかな。

やだな、こんな事を考えるなんてズルイな。

こんな事、夢に見ちゃうなんて、あたしがユキを好きみたいじゃん。

「……あんななんて……キライ」

夢の中でさえも可愛くない言葉を呟く。

その時、ふわりと誰かが頭を撫でる。

気持ちいい……。

なんだろう、何だか懐かしいかも。

昔、誰かに、ずっとこうしてもらっていたような気がする……。

「ごめんね……」

悲しいような切ない声が耳に届くとあたしの世界はフェイドアウトする。

「——っ！ チョコっ！」

「う、うわぁっ！」

あたしは、お母さんの大きな声で耳がキーンと鳴りながら飛び起きる。

「あんたは本当に女の子なの？ お母さん、時々、男の子を産んだんじゃないかって考えちゃう」

「はい？ なんでお母さん？ あれ？ ってか、あたし寝てた？」

ベッドの上で部屋をキョロキョロを見てから、仁王立ちになっているお母さんを見上げた。

「寝てた。寝るなら寝るで、ちゃんと寝なさいっ」

「あ……うん。そっか……夢……ね」

「何？ まだ寝ぼけてるの？ ほら！ 歯も磨かないで寝るつもりだったの？ あー、ヤダヤダ」

お母さんはブツブツと言いながら部屋を出て行った。

ひとり、ベッドの上に取り残されたあたしは、そつと頭を撫でた。そして、妙にはっきりとした感触を思い出す。

「最後、なんだっけ……何か言ってたよね」

あたしは、思い出そうとしても夢の中の声を、思い出せなくて歯痒かった。

そして、何故だが、幼い頃の思い出だけが、鮮明に思い出される。

「かわいい……か」

声にだして言うと、すぐに鼻で笑った。

今ではもう夢の中、思い出の中でしかきけないユキの言葉。

あれは、お姫様になれる呪文。

今のあたしには、誰も言ってくれないだろう言葉。

まあ、しばらくは、あたしがお姫様になれる日はこないね……。

8

お姫様になれる呪文（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。
（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

†あとかきという名の懺悔†

本日もご来場ありがとうございます！

数少ない奇跡の読者の方々！ 大感謝です。

なんでか突然、ばばーっと書けました。

寝るのも忘れて書いた感じですが。

只今、朝の4時！ やばい！ 仕事だ！

あと2時間後には支度をしないと！

とりあえず、寝ます！ おやすみなさいませー。

さて次回♪ 9 走ってきた騎士

予告が予告の役割をはたさないくらい、あっちこっちに動いてます。

ここ数話、王子のお話ばかりだったので、嵐君に登場してもらおうかなと。

実はチヨコちゃん、嵐君の方が理想なんじゃないのかなと書いて思っんですよ。

力強くて、守ってくれるタイプ。

王子タイプというよりは騎士タイプ。

お姫様と騎士もステキですね……あゝ、迷う結末。（なんちゃって

9 走ってきた騎士（ナイト）（前書き）

妹から「チョコボン、クライじゃないよ」というメールをもらった。

でも、ひとつ言わせてもらえば

チョコボンって何？

9 走ってきた騎士（ナイト）

日曜日なのに、午前中から動き出すのは久しぶりだった。
学校の日と変わりなく朝食をとると、あたしは手早く服を着替えた。

「あたし、これから出かけるから」

階段を降りながら、部屋の掃除に忙しく動き回るお母さんに声をかける。

「勉強はいいの？ 休みだからってサボっちゃダメでしょ」

「お昼までには帰るって」

そう言いながら靴をはく。

それに、ユキはもうこないと思うし。

これからは、自力で勉強しなきゃ……。

「いつてきまーす！」

気持ちが沈みそうになるのを止めるように大きな声を出す。

ほんと、嫌になる。

ユキの言葉に動揺しちゃって、バカみたい！

こんな日は、絶対に部屋にいたらダメだ。

あたしは玄関をでると、自転車に乗り、おもいつきりペダルをん

だ。

「よし！ 立ち読み！ 立ち読み！」

気晴らしで時々、立ち寄るコンビニはあたしの図書館がわり。

学校を通りすぎて、さらに離れた場所にある、その場所は、近所とは言えない場所だけど、今日はその距離がいい気分転換になるような気がした。

全力で自転車を走らせれば10分。

冷たい空気が頬をかすりながらも、コートの襟に顔をうずめる。
休日の人通りの少ない道を抜けると、大きな交差点の角にあるコンビニに見えた。

「いらっしやいませ」

コンビニのドアを開けると、忙しそうにレジを操作する店員が声をかけてくる。

あたしはチラリとも見ないで、入ってすぐ右の雑誌棚の前に立った。

まずは、週刊誌。

次はファッション誌。

順番を決めながら、山積みになっていた本日発売の週刊誌へ手を伸ばした。

「あ、すみません」

同じように伸ばされた大きな手とぶつかって、あたしは謝ると、すぐに手をひっこめた。

「あ、こちらこそ」

同じように手を引いて謝る相手の声に、ハッとして、顔をあげる。

「な、んで……アラシ？」

「うお！ チョコかよ！」

お互いで顔を見ながら声を上げる。

「何してんだ？ 立ち読みか？」

アラシは店内に響くような大きな声できいてきた。

「ちよっ！ アラシ、声大きい！」

「うおっ！ マジ？ 悪い……で、何してんだ？」

少しだけ声のトーンをおとすと、アラシは体まで縮めて、あたしの顔をのぞきこむ。

「ア、アラシこそ。何でここにいるのよ」

体を縮めても、少しだけ高い位置にある、アラシの顔をあたしは見上げる。

ジーンズに黒いニットのセーター、グレーの大きめのマフラーを

ざっくりと巻いただけの簡易装備の、はにかむアラシがいた。

まだ春には遠いのに、この服装じゃ寒いに決まってる……. と思いながらも。

見慣れない私服姿のアラシは、いつもより少しだけかつこよく見えた。

「あー、オレ？ オレんち、この近くだし、暇つぶし」

「え、そうなの？ ふうん、家ってこのへんなんだ」

通学路が逆なのは知ってたけど、どこに住んでるのかまでは知らなかったから、あたしは純粹に驚いた。

「遠いんだ……」

「だろ？ お前んちからは遠いだろ？ で、何で、その遠いやツがいるんだよ」

あ……。

これって、墓穴？

あたしはアラシの問いかけに、ぎこちなく笑う。

「うん。まあ、ちょ、ちょっと……ね。ほら！ 買い物！ そう、ここコンビニだしね！」

我ながら下手な嘘を……。

正直に言っただって別にいいのに……。

キョトンとするアラシに、あたしはひきつりながら微笑む。

次の瞬間、アラシは「ああ」と頷くと、意味深な笑い顔であたしを見る。

「なるほどな。受験勉強サボってるのが見つかったんだろ。それで、親とケンカしたな！ 当たり前！」

アラシは笑いながら、あたしの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「ちよっ！ 違うよ！」

UFOキャッチャーの景品にでもなった気分で、あたしは慌てて、その手から逃げる。

「やめてよ！ 髪がボサボサになったよ！」

「はあ？ 最初からボサボサだったんじゃない？」

アラシは楽しそうに笑って言いながら、大きな手をひっこめると、偉そうに腕を組む。

「元気でたか？ チョコらしくもねーな。お先真つ暗な顔なんかしてんなよな。ま、なんなら、オレが相談のるけど？」

「はあ？ 何ソレ、アラシに相談？ 無理すぎ」

眉間に皺をつくって手をパタパタと左右に振ると、ベーツと舌をだす。

偉そうなアラシは自信満々に、ひとさし指をあたしに向けると「ふんっ」と鼻を鳴らす。

「なんだよ、オレって結構、頼りになるんだぞ」

あたしは向けられた指を手で軽く払うと、反対にアラシを指差す。

「自分で言ったら終わり」

「なーにーっ」

ワザと怒った顔をするアラシに、あたしはクスクスと笑った。
そして、ふっと息をつくとき、アラシを見上げた。

「でも——」

「ん？」

アラシの顔があたしの次の言葉を待つのを確認して、ゆっくりと
微笑む。

「ありがとね」

本当に驚くほど素直になれた。

普段なら恥ずかしくて言えない言葉がサラッと云えた。

アラシなら……。。

もしかしたら、アラシの前では可愛くなれるのかな……。。

見上げたアラシの顔がみるみる赤くなっていく。

バカなヤツ。

単純なんだから。

ま、そこがアラシのいいところなんだけどさ。

あたしはクスツと笑って、アラシの腕をポンツと叩く。

「やっぱ、あたし、帰るね。こんなところで遊んでられないもんね」

放心するアラシに背を向けて、あたしは歩きだす。

なーんか、アラシを見てたら気が楽になったかも。

今さら、ユキと険悪になろうと、そんなの今のあたしには小さなことなんだな。

もう……ね。

コンビニのトアを開けると、大きく背伸びをして両手を空へ伸ばす。

な〜んか、本当、何をウジウジ考えてたんだろ。

よし！ 元気でした！

あたしは自転車に乗る前に、まだ店内で呆然と立ちつくしているアラシに向かってガラス越しに手を振る。

アラシは我に返ったように慌て始めると、あたしに手を小さく上げる。

あたしは吹きだして、自転車の向きを変えると、勢いをつけて自転車に乗った。

見上げると青い空が広がっていて、冷たい空気が空の色を鮮やか

に見せた。

あたしの世界は広い！

ユキと離れて、麻衣っていう親友ができてアラシっていう仲間ができた。

もう、あたしの世界はユキだけじゃない。

小さかった頃とは違うんだぞ。

わかってんの？ ユキ。

二人だけの世界から広い世界に飛び出しちゃったんだよ。

ユキも同じでしょ。

ユキにはユキの、あたしにはあたしの世界があるんだから。

無理に戻ろうとしたからダメだったんだね。

一つだった懐かしい小さな世界は二つになっちゃったんだから。戻れないってわかっていれば……。

もう、ユキの言葉なんかで傷つかない。

「よしっ！ 勉強がんばるかー！」

軽くなった心みたいに、ペダルも軽く感じながら、自転車のスピードをあげて、あたしは声をだす。

ユキが何？

キライならキライで結構だよ！

もう、あたしの世界にユキなんかいないんだから！

島崎の表札の前をスルリと通り過ぎると、キキーツと大きなブレーキ音をだして、自宅の前で急ブレーキをかけて止まる。

さうで、スッキリしたし。
勉強でもするっかな。

あたしは車庫に自転車を片づけると、玄関への門に手をかける。

「チヨコ！」

突然、ハアハアと荒い息遣いと一緒にあたしの名前が響く。

「へ………？」

振り返ると、さっき別れたばかりのアラシが額に汗をびっしりとかいて、苦しそうに肩を上下させながら立っていた。

「アラシ?? ちょっ、ちょっと! どうしたの!？」

あたしは慌てて、アラシへ駆け寄る。

「お、お前つ………はあ………はあっ」

やっとの事で呼吸しながら、アラシはヨロヨロとあたしに近づくと肩をつかんだ。

「な、何? ちょ、ちょっと………大丈夫? 水、持ってくる? ってか、なんで? なんでいるの? つけてきたの!？」

わけがわからなくて、あたしは苦しそうに呼吸を整えるアラシに、いくつも質問をぶつけた。

「あのっ、はあっはあ……。あのなっ！　べ、勉強とか受験とか！」

アラシは時々、息をつまらせては苦しそうに顔を歪める。

「わかった、わかったから！　落ち着いてよ。いい？　すってゝはいてゝすってゝ。ほら！　深呼吸して！」

あたしはアラシの顔を見つめ、深呼吸をしてみせる。

それに合わせるように「スーハー、スーハー」とアラシは深呼吸をはじめ。

「そうそう。落ち着いた？」

アラシはあたしの肩を掴んだまま深呼吸を数回すると穏やかな表情を取り戻す。

「ったく、一体なんなのよ。何考えてるのよ。ずっと走ってきたの？　いくらアラシが体育会系でもさ、あの距離を全力疾走は死ぬって。ばっかだね」

あたしが自転車を飛ばして帰宅したんだから、ほぼ同時にあらわれたアラシは、猛ダッシュだったに違いなんだ。

思い浮かべながら、ケラケラと大笑いするあたしにアラシは照れたように小さく笑う。

「つくしよ。かつこ悪いな……。なーんか上手いかなー」

「本当、かつこ悪いっていうか、ボロボロだね。まあ、あたしも上手いかない事ばっかだけだね」

昨夜のユキの一言で、あたしは動揺して勉強どころではなかったんだから。

『クライだよ』

あの一言がなかったら、あたしはユキと……。

——キス、してた。

そう思うと身震いする。

そして、目の前で苦しそうな顔で深呼吸するアラシの顔を見つめた。

夢見る乙女なんかじゃないけど、遊びでそんなことできない。

やっぱり、そーいうのは、気持ちが必要だと思うんだよ。

そう、こんな風に、アラシみたいに。

あたしを心配してくれたり、優しくしてくれたり。

そーいうのが積み重なって、「好き」って思えたときに、自然とするもんじゃないの？

あたしはアラシに微笑みかける。

アラシは真顔になると、思い切ったように口を開く。

「チョ、チョコ！ あ、あのさ、オレ……お前の事、その、なんっか」

アラシは上を向いたり、下を向いてみたりして、うるさいくらいに顔を動かし始めるとモジモジします。

あ……。

うそ、冗談でしょ？

まさか、こんなところで告白とか言わないでよ。

冗談じゃないと、あたりを気にしながら、あたしはアラシをなだめるように笑う。

「な、なに？ 真面目な顔しちゃって、似合わないって！ あ
まさか、道がわかんなくて帰れないとか？ な～んてね」

「ばっか！ 違うっつーに！ オレはただ……。ただ！」

あたしの苦しい逃げもおかしいけど、この状況はもっとおかしい！
だって、どー考えても、アラシがおかしい！

顔を背けながら、アラシの妙な熱いまなざしを感じていた。

「お、オレは！」

「アラシ、アラシ！ ちょっと、肩が痛いつて」

「聞けって！ オレは！ おっ、お前の事が好きなんだよ！」

「痛っ！ ——っ！」

も——っ！

こいつ、言っちゃったよ。

肩の痛みと突然の告白にあたしの頭も神経も麻痺していた。

アラシの気持ちはなんとなくわかった。
でも、まさか、今日？

「痛いじゃねーよ！ オレは本気だからな！ こんな事、冗談で
言えるか」

アラシは顔を真っ赤にして、一気にまくしたてた。

「アラシ……、あんた……本気？」

あたしはアラシの顔をみつめながら、ゆっくりと言葉を探す。

冗談じゃないって。

麻衣の言ったことつてが当たってた、すごいとか。

アラシがあたしを？ いやーん、恥ずかしいとか。

祝！ 初カレシ！ やったー！ なんて思えないって。

どーすんのよ。

これって、ありがとうとかって答えたらOKって事になるの？
ってか、今、返事すんの？

どーすんの！ あたし、わかんないし！

ごめんとかって言ったら、気まずくなるんでしょ。

あーっ。

もう！ この忙しい時期になんてことしてくれんのよ！

混乱する思考を必死で整列させようとするのに、頭のグルグルは
止まらなかった。

「チヨコはどうなんだよ」

どうなんだよって？

正直、迷惑！

……なんて、言えるわけないし。
どうしよう……。――

強張る顔を無理矢理、笑顔にしてアラシの赤い顔を見上げた。

「あ、あたしは――」

――パン、パン、パン。

あたしの言葉を遮るように、どこからともなく拍手が響く。
ビクッと体を震わせて、あたしは恐る恐る拍手の出所に目を向けた。

隣の家、いつの間にか島崎家の門の前に立つ、背の高い人影。
それが誰かなんて顔をみなくたってわかる。

――ユキだ。

その瞬間、あたしは何故だか背中が冷たくなるのを感じていた。

走ってきた騎士（ナイト）（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。
（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

†あとかきという名の懺悔†

本日もご来場ありがとうございます！

早い早い！

ちよつといい感じに書けてます。

それもこれも、イメージを膨らませる、たくさんのイラストを送ってもらえたから。

そもそも、美形つてのがなんぞや？ だった私なのでイメージがわからない。

美形つて……。

そんな時、イラストをもらえると、うはーってなって書けるといふ不思議。

イラストを見せられないのが残念ですが、データでとってあるのでHP開設後にアップできたらなって思ってます。

さて次回♪

10

王子VS騎士

もうベタなのですみません。

やっぱり、決闘とかあったほうがいいかなと。

ってか、チヨコちゃんは、まだ誰のものでもなんですけどね。

先走り騎士と思い込み王子なんで……。

やっぱり、アラシの方がいい感じになっちゃったしな……。。

10 王子vs騎士(前書き)

もう、文章はおなかいっぱいなので。
ちょっとお休み。

2日くらい休んで、そしてまた書きますね。

10 王子vs騎士

大通りから外れた住宅街。

休日の正午前という時間もあつて、人も車も通らない。

そう。

通りにいるのは、向かい合いながら、あたしの肩を掴んでいるアラシと掴まれているあたし。

そして、ユキの3人だけだった。

「な、なんで……お前……島崎夕紀？」

最初に口を開いたのはアラシだった。

「いたら悪いの？」

ユキは答えながら、学校で見せる、柔らかな微笑を見せる。

「アラシ……あのね、ユキは、あ……えっと、島崎君はお隣さんで」

あたしがアラシに説明をすると、ユキの顔が一瞬だけ眉をひそめた。

「へ、へ……。チョコと島崎って、いわゆる幼馴染ってヤツ？」

アラシは、おどけたようにあたしとユキを交互に指差した。

「あ、まあ。そんなところ……かな？」

「初耳、だな」

アラシの目が責めるようにギラリと光る。

「別に、秘密でもなんでもないし。隣に住んでるっただけだよ」

「ふん。島崎が幼馴染、ね」

アラシは複雑そうに低い声を出す。

「な、なによ！ アラシは中学からだから知らなかっただけじゃん。麻衣は知ってるんだし！」

小学校から一緒だった人なら誰でも知ってること。

だけど、学区の違ったアラシは知らないことだった。

だからって別に隠してたわけじゃない。

ただ、本当に言う必要がなかっただけ。

「わかった。チョコを信じる。——ってことで、島崎。今、いいとこなんだ、邪魔しないでくれると助かるんだよな」

友好的なアラシにはめずらしく、言葉がトゲトゲとしていた。

ユキは呆れたように、ため息をひとつこぼすと、アラシを睨む。

「ねえ、どういう神経してるの？ どう考えてもチョコちゃんは迷惑そうにしか見えないけど？ 本多君って鈍感なんだ」

「ユキ！」

売られた喧嘩は買いますとばかりに、冷たく言い放つユキにあたしは叫ぶ。

「なんだ、ちゃんと呼べるじゃん」

ユキは目を細めて意味深に微笑む。

「チヨコちゃんが、『島崎君』なんて気持ち悪い呼び方するから、どうしちゃったのかと思ったよ?」

陽の光にあてられたユキのサラサラの髪の毛が茶色に透けてみえた。

前髪が揺れると、その隙間に見えるふたつの目は、優しい声色とは裏腹に、怒っているように、あたしを見据えている。

「そつ、それは!」

「っていうか、本多君って何様なの? 僕の家の前で勝手に青春ドラマはじめちゃってさ、それで僕に邪魔って? 信じられないね」

あたしの言葉を無視して、アラシへ視線を向けると、ユキはひどく冷めた声をだす。

「それは……」

アラシはユキの言葉に押されるように言葉がでなかった。さつきまでの威勢なんて、ユキの壮絶な冷笑を前に吹き飛んでしまったみたい。

「それにさ、ダメなんじゃない?」

「な、なんだよ。ダ、ダメって……」

「本多君、僕に勝てるの？」

ユキがにっこりとアラシに微笑む。

アラシは何かに一瞬、驚いて、すぐにあたしの顔を見る。
そして、何か言いたそうに、唇を動かした。

え？ え？

な、何？

どうしちゃったの、アラシ？

今の何か変なの？

え？ あたし？

今の話にあたしはいないよ？

あたしは意味もわからずに、フルフルと首をふつてみる。

「……チヨコ、お前……」

アラシは奇妙な顔をして、あたしとユキを交互に見た。

まさか、ユキにかなわないから、あたしに援護しろとか？

それって、情けなすぎでしょ！

あ！ わかった！

幼馴染全開な呼び方が気に入らないってヤツか！

目の前で、「あー」とか「うー」とか言いながら、肩を掴んだままの体勢で、アラシは何かを言い難そうにしていた。

「な、何よ。何なのよ！ どうしちゃったの？ あ、あたしがユキって呼んでたって事、気にしてるの？ ユキが隣に住んでるのが、そんなにまずい事なの？ ねえってば！」

ああ、これじゃあ、あたしがアラシを好きみたいだ。
別に隠してることなんてないんだし。

あたしが慌てることなんてひとつもないんじゃないの。

「マツ、マズくねえよ！ マズくねえっ……けど。あいつは……」

アラシの目がチラリとユキを見る。

「ユキは関係ない！ マズくないなら——っ！」

しまった、と思った。

気がついたときには、期待するアラシの顔と、怒り狂うような鋭い目つきのユキに睨まれて、あたしは固まった。

いやー！

何かヘン！

何か違うでしょー！

あたし、何言い出すんだ！

もーっ！ 自分で何言いたいのかもわかんないよ！

あわわわっ。

ふたりして見てるし！

見ないで、見ないで。見ないでー！

もーっ！ なに考えてるのよ、あたしのバカー！
続きはなんだっっのよ。

アラシに好きでいてよとでも頼むつもり？

ほら！ アラシってば、絶対に期待してるって！

いやーっ、ミス！ ミスだって。

「な、何よ！ 二人してジロジロと！ つ、続きなんてないんだから！ そつ、それに！ 受験前に好きだ嫌いだって言ってる暇なんかないでしょ！」

あたしは早口に言うつと、肩を上下に揺らした。

目の前のアラシは髪をかきあげると、あたしの困惑を笑った。

「まっ、その返しはチョコらしいっつーか。オレもちょっと早まったかな〜とか思ったし。島崎の邪魔は好都合かもな」

「アラシ……」

「受験、終わってから再チャレンジする。状況もよくわかったし……な」

視線の先には口を閉ざしたユキ。

「……僕も、よくわかったよ」

黙っていたユキが口を開く。

その声は低く、どこか挑戦的だった。

「なあ、島崎って、どっちが本物？」

アラシは苦笑いしながら腕を組む。

「お前って女子のあいだじゃ、可愛いとか、王子とか言われてるけど、学校とずいぶん印象が違うんだな。こっちが本物か？」

「さあ？ 僕の質問に答えてないのに、答えてやる理由ないよ」

「質問？ ああ、勝てるかってヤツか？」

アラシはニヤリと笑って、あたしを見てから、もう一度ユキを見る。

「大丈夫だろ？ なんかお前の一方的な思い込みみたいだし、オレの方が有利みたいだしな」

アラシはあたしの肩をポンッと叩く。

「有利って何よ」

「チョコ、お前さ、もっと自覚しろよな」

睨むあたしのおでこをアラシはチョンッと指で小突く。

「ちょっと、やめてよ！」

「ま、せいぜい、幼馴染ごっこでもしてたらいいさ」

アラシはあたしの文句もへっちゃらと笑う。

「ふん。余裕ってわけだ」

アラシの態度にも特に反応しないで、ユキは涼しげな顔であたし

たち二人を見ていた。

「強敵ではあるけどな」

「本多君って趣味悪いね」

アラシもユキもお互いを見つめあってるだけで、動かない。

「お互い様だろ？」

「……そうだね」

最後に、ユキが笑う。

「チョコ、じゃあ、オレ帰るわ」

「あ……う、うん。なんかよくわかんないけど、ごめんね」

あたしが小さく謝ると、アラシはあたしの頭をグシャグシャとかき回す。

「ちょっ！ もーっ！ やめてって言ったでしょ！」

両手を振り上げて声を上げると、アラシは笑って手を軽くあげる。

「じゃ、またな」

「こらーっ！ 逃げるな！」

あたしは小走りに去っていくアラシの背中に叫ぶと、突然、静け

さを取り戻した道路にポツンと立っていた。

「仲がいいんだね」

数拍おいて、ユキが静かに話しかける。

「話しかけないでよ。あたし、まだ昨日の事、許してないんだけど」

「ご立腹だね」

「あたりまえでしょ！ 昨日の事もそうだけど、アラシに対して失礼じゃん！ あーいう時は、見て見ぬフリするとか、気づかれなないようにするとかってできるでしょ」

「迷惑そうにしてたから助けてあげたのに、その言い方ないんじゃない？」

ユキはふんつと鼻で笑う。

そして、明らかにさっきまでとは違う口調で話しはじめた。

「それとも、好きでもないのに、つき合うつもりだったのか？」

「そ、それは……」

「オレ、あいつ嫌いだ」

拗ねた子供みたいな言葉にあたしは驚いてユキを見た。

「オレに触られるのは嫌なのに、あいつはいいのかよ……」

「はあ？ 何、ドラマみたいな事、言ってるのよ」

あたしはわけがわからなくて、ユキに近づく。

「来るな！ だから……キライなんだよ」

ユキは悔しそうに唇を噛む。

「なにそれ。だったら、あたしにかまわないでよ！」

「最低だ」

「はあ？」

「チヨコちゃんはいつだってそうだよな。いつだって、忘れるんだ」

ユキ？

真っ青な顔して、どうしちゃったわけ？

忘れる？ あたしが何を忘れてるっていうのよ。

「ねえ、何を……」

「それより、今日分の宿題、ちゃんと終わらせるよ。終わってなかったらどうなるかわかってるんだろ？」

「え、あんた……来るつもりだったの？」

「誰かさんと違って、無責任じゃないからな。じゃ、いつもの時

間にな」

ユキはあたしを睨みつけると、そのまま玄関に消えた。

全然、わからない。

ユキの言葉も行動も理解できない。

昔は誰よりも一番わかっていたのに。

今は、全然、わからん！

いつの間にか、ぽつんと一人になっていて、あたしは居心地の悪さに急いで家に入った。

10 王子vs騎士（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。
（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

†あとかきという名の懺悔†

本日もご来場ありがとうございます！

すごくすごく忙しくて、全然かけてません。

ビックリな事に、お誘いというか、依頼がありまして、只今、苦戦中です。

そっちは締め切りとかがあって、引き受けた以上書かないとダメなのです。

それで、とても両立はできないのでしばらくはまた書けそうにありません；；

書き上げたら、すぐに続きを書きますから！

何気に、前の作品よりもこっちのほうが妹ウケがいいみたいなのでちょっとがんばってます。

さて次回♪

11

お姫様の憂鬱

火花散らした王子と騎士との対決後。

少しずつ、何かが変わっている事に気づいていくチヨコちゃん。
久々の友人、麻衣ちゃんの登場の予定です。

11 お姫様の憂鬱（前書き）

おはようございます！

PCの方には目次に絵が貼り付いています。

見たくない！と言われても強制的に見えちゃいます。

イメージが違うと言われると違います。

いわゆる準備段階の時のイメージ絵なので本編とはずれていたりします。

昨日、私の専属イラストレーター（妹）に発注したのでちゃんとしたヤツは近日公開予定です。

11 お姫様の憂鬱

はあ……。

あたしは2階にある教室の窓から中庭をなにげなく見下ろしながらため息をつく。

昼休みを迎えて、教室は明るく賑わっているのに、あたしの気持ちとはどんどん暗く重くなっていくような感じがしていた。

「元気ないねー、チヨコらしくないじゃん」

「あ、麻衣か……」

あたしの肩に手をかけて、顔をのぞきこんでくる美少女をチラリと見ると、また外へ目をむける。

「何？ ついこの前まで、猛勉強してたかと思ったら、今度は一人でぼーとしちゃって。何かあった？」

麻衣は心配そうにあたしの隣に立つと、一緒に窓の外に目を向けた。

「何かって程でもないけど……ちょっとね」

そう、ちょっとだけ。

少しだけ気分が重いつていうか、モヤモヤしてる。

たぶん、昨日のユキの言葉が原因だとは思っただけ。

『チヨコちゃんは、いつだって忘れるんだ』

忘れる。

あたしが、何を忘れてるって？

まるで、あたしが悪いみたいなの、あの目はなんだってのよ。

あんなユキ……久しぶりに見た。

今でも、あんな怒り方するんだ。

それにしても、あたしもあたしだよ。

なんでこんなに気になるの？

ちよつと異常だよ。

あたしはもう一度、ふうつとため息をつく。

「ちよつとつて顔してないんだけど。そんなに言いにくい事？

あ、わかった！ さっきの小テストの点が悪かったとか？」

麻衣はひらめいたとばかりに大きな声を出す。

4時間目に行われた英語の小テストは、すでに忘れてしまいたい過去だった。

それなのに、見事に思い出させてくれた麻衣は余裕の笑顔を向ける。

あたしは、その笑顔を見た瞬間、頭をぐったりと垂らす。

「あゝ……あれね。普通に悪かったよ」

英語は盲点だったな……。――。

苦手な数学ばかりに気をとられてたからな。――。

あたしは、いかにも苦しんでいますと、唸ってみせた。

「あー、やっぱりテストか。そっか、普通に悪かったか。あれだけ勉強しても身にならないってキツイね」

元氣のないのは『小テストの出来の悪さ』だと思ってしまったのか、同情するように、麻衣は、あたしにぴったりとくつつく。

「麻衣が羨ましいよ……はあ……。もうすぐ受験なのに、家庭教師は鬼みたいだし、小テストの結果なんてとても見せられない……」

「へー、家庭教師？ チョコのお母さん、ついに秘密兵器を雇ったんだ」

「ま、まあ……ね」

あたしは、こたえながら、ぎこちなく笑う。

窓から差し込む陽は暖かくて、春が近いのを感じさせる。
中庭には、寒さを恐れない男子が走り回って、廊下から先生が注意するのが見えた。

「あらら。アラシじゃん」

麻衣が突然言った、その名前に、身体がピクリと反応する。

「うわ、ばっかだね。先生に怒られてるし」

麻衣はクスクスと笑いながら、閉まっていた教室の窓を開ける。
暖かい日差しからは想像もできない冷たい空気が、全身にまとわ

りつく。

「うつ、さむっ」

あたしは思わず、肩を縮める。

「アラシー！ バカやってんじゃないよー！」

麻衣は、窓から大きく手を振る。

下にいる男子の一人が、窓の下へ近づくと、両手を大きく振り上げる。

「ほっとけー！ お前からこそ、そんな隅でイチャイチャしてんな！ キモい！」

「うるさい！ 大きなお世話！」

「おーい！ チョコいるんだろ！」

窓から身を乗り出している麻衣の姿はよく見えても、すこし奥にいるあたしは、どうやら下にいるアラシには見えないみたいだった。

「アラシなんかと話したくないってさ！」

「うるせー！」

「報われないねー！」

口の悪いアラシに、麻衣はそう言って、まるで悪い魔女みたいにワザとらしく笑った。

「つたく！ それこそ、余計なお世話だ！」

窓から下を見下ろして、麻衣はクスクスと楽しそうだ。そして、ゆっくりと、あたしの方を向くと、きれいな唇をすぼめる。

「ご愁傷様だよね。アラシなんて相手にしてないのにね」

「麻衣、いい加減にしないと、本性丸出しだよ」

「いいって、いいって。どうせ、アラシだもん」

言葉の最後で、麻衣は意地悪く微笑む。

どうしよう。

麻衣にアラシとの事、言ったほうがいいのか。でも、何て言えばいいの？

あたし、アラシに告白されちゃった！ とか？
結局、ユキに邪魔されてお流れになったのに？
ユキの事も説明しなきゃだし……。

面倒だ。

あたしは、外にいるアラシをからかう麻衣の背中を見つめながら、ため息をついた。

その時、アラシがあたしを呼んだ。

「チヨコーっ！」

中庭から、校舎に響きわたる、あたしの名前。

「チョコーっ！」

何度も、何度も、あたしを呼ぶ、アラシの声。

「滝沢 千代子ーっ！」

うっそー！

フルネームで呼ぶか！？ 普通！

「ちょっ！ バカじゃないのっ！」

無視できなくなつたあたしは、麻衣の脇から窓の外へ顔を出す。

見下ろせば、すぐ真下にアラシの無邪気な笑顔があつた。

背の高いアラシを見下ろす、不思議な感覚に、あたしは戸惑いながら、叫ぶ。

「あんたね！ 恥ずかしいことしないでよ！」

顔を赤くして、興奮するあたしに、アラシは微笑むと、息を吸い込んでるように見えた。

そして、次の瞬間――。

「今日、一緒に帰ろうな！」

下から聞こえる、アラシの大きな声に、あたしは目を見開く。

アラシの周りにいた男子も、二階の教室に入りこんだ声を聞きつけたクラスメイトたちも、一斉にあたしとアラシを見ていた。

「え、ええ？ なに？ いつの間に？」

麻衣の上ずった声が、大勢の視線を代表してきいてくる。

「まさか、その事で悩んだの？ あ！ ここでアラシを見てた？ 嘘でしょ……」

麻衣は、心底、驚いた顔をして、唇を噛んだ。

その表情に、小さな違和感を感じてはいたけど、今のあたしはそれどころではなかった。

「ちょっ、麻衣っ！ 違う！ 違うってば！ もー！ 黙れ！
アラシ！ 勘違いされるでしょー！」

最後はアラシに向かって、大声を出した。

「気にすんなー！」

アラシは楽しそうに笑いだすと、ふざけて走り出す。

「なっ！ 何なのよ！ アイツー！ 信じられない！」

あたしがアラシの姿を目で追いながら口を尖らすと、隣の麻衣が、小さな声でボソボソと言う。

「まさか……違うと思ってたのに……」

「ん？ 麻衣？ 何か言った？ アラシの事なら、本当に違うんだからね」

あたしの言葉も届かないのか、麻衣は何か考えこんでいた。

「麻衣？」

「え、え？ あ、ごめん……何？」

ハツとして、麻衣はあたしの顔を見つめる。

「どうしたの？ 変な顔してる……」

「ひつどい。変な顔はないでしょ。ちょっとびっくりしたただけ、何でもない……」

今度は、麻衣の方がなんでもないって顔じゃない。

「だから、誤解なんだって。アラシの事なんて——」

「チョコ、ごめん。用事、思い出したからさ、また後で、ね？」

「え？ う、うん……いいけど」

麻衣は何かを思いついたように、あたしに背をむけると「ごめん」と言い残して、教室を出て行った。

あたしは、その姿に小さく首を傾げる。

開いた窓から陽の光と一緒に、冷たい風が入ると、あたしは身震いをした。

「さむっ」

あたしは窓を閉めるように、手を伸ばす。

何気なく見えた中庭をはさんで向かい側の校舎、薄暗い廊下が目
がとまる。

誰かがこちらを見ている。

気のせいなんかじゃない。

確かに、ここの教室を見てる。

「……ユキ？」

ゆつくりと、窓を閉めながら、視線は人影からはずさない。

—— やっぱり、ユキだ。

そう確信した瞬間、胸がチクリと痛んだ。

全部、見られた。

いままでの会話を聞かれた。

何故か、あたしの心は焦っていた。

血の気が引いていくあたしと向かい合う人影。

あちらの校舎の窓から、教室の方を向いて、動かない。

ただ、前髪を掻きむしるように、掴んでいるように見えた。

うつん。

これは確信。

あの人影はユキで、きつと、また責めるような目で見ていて。
今は、あたしがユキに気がついた事もわかってる。

だから、前髪を引っ張るんでしょう？

だって、あれはユキの癖だから。

あたしは知ってるから。

悔しかったり、悲しかったり、何かを堪えている時に、必ずしてた。

『泣かないで、泣いちゃダメだよ』

ふいに、幼いあたしの声が脳裏に響く。

『大丈夫。ユキの事をキライになったりしないよ』

これは、いつの記憶……？

ユキは泣き虫だったから、泣くユキなんてめずらしくもない。でも、そうだ。

ユキは泣く前、必ず、あんな風に前髪を強く握ってた。それで、ひとりで泣くんですよ。

なんでよ……。

どうして？

どうして、ユキがそんな風になるのよ。

そんな事……おかしいじゃん。

あたしの事、嫌いなくせに。

恨んでるくせに……。

だけど、もしかして、そんな事ないだろうけど、もしも、もしもそうだったら。

あたしは、何かを確かめたくて、もう一度、窓を開けようと手を伸ばす。

「チョコーっ、ねえねえ、アラシとどうなってるの？」

突然、背後がから大勢の気配がして、振り返る。

そこには、教室にいたクラスメイトが、目を輝かせて迫っていた。

「やっぱ、アラシってチョコ狙いだっただ」

「私は気づいてたけどね！」

「あ、ずるーい！ あたしも気づいてたし！」

「で、どうなの？ やっぱ、つきあってるの？」

「今の時期はヤバイんじゃない？」

「先生、うるさそー」

「でも、愛に障害はつきものってね」

口々に、勝手な事を言いながら、ジリジリと確実に迫っていた。

「あ、あのさ、誤解だよ。アラシとは友達っていうか、仲間だし」

あたしは、窓に背を張りつかせて、首も、手も、ちがうちがうと振り続けた。

「なによー、隠す気？」

「か、隠すもなにも、まったくの誤解だし」

「うわー、下手な嘘ついちゃって。ほら、麻衣も隠してるみただけど、バレバレじゃない。チヨコも同じくらい、バレバレ！もう、白状しな」

——麻衣がバレバレ？ バレバレって、隠してるつもりが隠れてないってことで。

つまりは、何かを隠してるって事？

「あれ？ チヨコは麻衣から聞いてるんでしょ？ ラブちゅー彼氏」

「は？ 何？ ラブちゅー？」

ラブちゅーって何語？

そんな事を思いながら、あたしの首は難解な言葉で直角に曲がる。

「えー、そんなの男の事に決まってるじゃん、ね？」

「そうそう、最近は結構ね、堂々と一緒にいるし、ね？ すっごいラブいよ」

ラ、ラブい？

男？

つまり、彼氏でしょ？

しかも、麻衣に？

「アハハハ……まさか……麻衣に彼氏？」

ありえないと笑うあたしに、目の前のたくさんの顔が「嘘じゃない」とにんまりと笑う。

うそ。

何も聞いてないよ。

あたし、麻衣から何も聞いてない……。

彼氏が誰とか、そんなのはどうでもよかった。

麻衣が何も言わなかったことに、軽くショックを受けていた。

自分の事は棚に上げて、あたしは麻衣を責めていた。

友達なのに、一番の友達なのにつて。

険しい顔に、詰め寄るクラスメイトの足も止まる。

「あ、ほら！ 噂をすれば！」

クラスメイトの一人が、窓に向かって指をさす。

あたしは、ゆっくりと首をまわすと、指し示されたほうを見る。

向かい校舎の廊下を走る、麻衣の姿を確認すると、心臓がドクンと鳴った。

麻衣、どこに行くの？

そんなに急いで、何の用事なの？

そこには、何もないよ？

あるのは準備室とか、普段は使われていない教室ばかりだよ？
ねえ、麻衣、やめてよ。

やだよ……。

そっちはやめて。

だって、そっちは……。

「うそ……冗談キツ……」

喉が渴くのを感じながら、呟く。

妙な汗もでてる。

耳の奥、目の奥のほうでドクンドクンと脈打つ。

麻衣を見失わないように見開きすぎた目が痛くなる。

見たくない。

だって、そっちは……。

——ユキしかない。

あたしは、ガラスに張りついた蛙みたいに、手をぴったりと窓につけた。

そして、目に映る麻衣の姿が今、向かいの校舎にいるユキの前に。

あたしは瞬きをすることもできずに、ゴクリと喉を鳴らした。

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。
（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

†あとがきという名の懺悔†

本日もご来場ありがとうございます！

更新速度は、悲惨の2文字ですね。

書きたい気持ちはいっぱいですが、時間が……。

お詫びになるかどうかわかりませんが。

チョコちゃんたちを書きはじめたばかりの頃、

いただいた絵を目次ページにアップしました。

PCの方しか見られませんが、夏バージョンなのは気にしない！

でも、これって書く前だったので、イメージが違うんですね。

なので、再度お願いしました！

次の更新のときに、よりイメージに近い絵を貼りたいと思います。

絵がキライって方には、残念な感じですよね……。

チョコボンは少女漫画風味なので、ご了承くださいませ。

さて次回♪

12

キラキラ王子と噂の魔女

まだ終わりません。

全20話予定なので、下りはじめっていうところですね。

王子と魔女、麻衣ちゃんの関係ですね。

この辺を説明するお話になるかと思っています。

この辺りから、チョコちゃんが女の子らしくなってくれることを

願って！

また、気長にお待ちいただけたら嬉しいです。

12 キラキラ王子と噂の魔女（前書き）

祝！！ 更新！！

75日以上更新されてませんって赤字脱出です。
それだけで、ホッとしました。

12 キラキラ王子と噂の魔女

教室の窓から見えるのは、いつもの景色。

日の差す中庭。

薄暗い向かいの校舎。

騒がしい教室。

廊下を意味もなく走る生徒の足音や叫び声。

いつもと何も変わらない昼休み。

違うのは、隣にいるはずの麻衣が、今は、遠い向かいの校舎にいること。

あたしは、好奇心で目を輝かせるクラスメイトたちに囲まれていること。

よくはわからないけど、麻衣のそばにはユキがいること。それだけ。

それだけなのに、足のつま先から冷たくなるのを感じた。

「麻衣、うらやましすぎ〜」

背後から聞こえる、ため息まじりのうつとりした声。

「ヤバイって！ 王子ファンが絶対に怒るって！」

「わかる！ 王子ファンって熱すぎだしね」

「ってか、今まで隠してきたのに、どうしちゃったんだろ」

クラスメイトの好奇心は、あたしから麻衣にうつっていく。

「隠してきた……？」

あたしは、遠くに見える、麻衣とユキを見つめながら、呟く。

「やだな。チョコって本気で知らないわけ？」

「あーん。私も王子にみつめられたーい」

「あー、ずるい！ 私だって」

「でも……私、ただの噂だと思ってたよ。ちよっとショックかも」

「私も……。だけど、こんな現場みちゃったら、信じるしかないっしょ」

好き勝手に話したすクラスメイトに、苛立ちを感じながら「ねえ！」と強い口調でさえぎった。

「全然わかんないけど？」

あたしの声の強さに、クラスメイトたちが静まり返る。

ヒソヒソと小さな囁きが耳に煩わしく聞こえてくる。

そして、決められたように、順番に話し出した。

「まあ、アレだよ、チョコ。いくら親友でも言えないこともあるって」

「そー、そー。チョコは恋バナ、嫌いだし」

「麻衣と王子の噂って、結構、広まってたから、知らない人、少ないんじゃないかな」

「噂？」

窓ガラスから、はね返ってくる、あたしの声は、驚くくらい低かった。

「んー、噂っていうのは、最初はね、王子が誰かに告白するっていう噂だったの」

「あ！ わかる。バレンタインを狙ってるんじゃないかってヤツでしょ？ そしたら、麻衣と一緒にいるのが目撃されたんだよね。これがまた、憎いくらいにお似合いなわけだ」

「あー、それからかな？ 麻衣がその、告白の相手なんだって噂になったのって。王子ファンはショックを受けたよね」

「まあ、私たちは、王子ファンってワケじゃないから、ちょっとショックだったくらいかな」

「相手が、麻衣じゃかなわないしね」

クラスメイトの言葉が、ひとつの事を浮き上がらせる。

ユキが誰かに告白しようとしてた。

その相手は麻衣で、麻衣とユキは公認のカップルって事なんだ。

王子と姫が会って、恋をするなんて、本当ですぎてる。

だけど、その事を、あたしは麻衣からも、ユキからも聞いてなかった。

なによ、そういうことね。
隠すことないのに。

あたしは鼻で笑う。

「くだらない」

胸がキリリと痛む。

「チョコ」。そんなに怒らないでよ。きつとチョコになら、教えてくれるって」

窓の向こうに見える麻衣とユキを見つめながら、あたしは、クラスメイトたちの勝手な言葉に眉をひそめた。

怒ってる？

怒ってなんかいないよ。

麻衣は教えてくれる？

別に聞きたいことなんかない。

でも、なんだろう。

あたし、ちよつと変かも。
なんか、苦しい。

どうして？

どうして、こんなに息苦しいの？

どうして、こんなに……面白くないんだろう。

指を曲げると、窓ガラスにツツと指の跡がつく。

少しだけ曇った、その筋を一瞬だけ見て、また視線を二人にうつした。

「まあ、いいじゃない。チョコにはアラシっていう王子様がいるんだから」

「そうだよ。アラシだって結構、人気あるんだよ」

「恋に興味ありませーんって感じだったチョコに先をこされるなんて、な〜んか悔しい」

「でも、あれかな？ チョコ、実は、王子の隠れファンだったとか？」

最後の言葉に、あたしは目を見開く。

「なっ！」

思わず、振り返ったあたしに、クラスメイトたちは驚いたあと、ニヤニヤしはじめる。

その時、はじめて気がついた。

あたしの背後に、クラスの女子の半分がいることに。

なんで、こんなに……。

あたしが呆然とすると、すかさず声が飛び交う。

「やつぱり。チョコは王子ファンか」

「ちがう！ そんなんじゃない！」

ムキになって言うと、余計に冷やかしは強くなる。

「ほー。チョコが王子狙いとは、盲点だったな」

「チョコから、王子の話題って、でたことなかったもんね」

「そ、こ、が！ アヤシサ倍増？」

お互いがお互いで指をさしあいながら、クラスメイトたちは興奮していく。

「でもさ、チョコって確か、王子の家のお隣さんじゃなかった？」

「まずい！」

どうして、今、その話題がでるんだろう。

あたしは、たくさんのクラスメイトの前で唇を噛んだ。

「うそー！ 知らなかった！」

あたしに向かって一斉に強い視線が向けられる。

別に秘密でもなんでもない。

あの事件が起きるまでは、本当に仲が良かったんだ。
憶えてる子もいるはず。

だけど、タイミングが悪すぎる。

このままだと、流れがおかしな方へいきそうだった。

あたしは、大きく腕を振り上げると、目の前の机をバチンと叩く。

「もー！ やめてよ。あたしは王子ファンじゃないし、狙ってもない。麻衣が誰とつきあおうが、あたしには関係ないし！」

大きな音と、大きな声で、クラスメイトは静まり返る。

なんともいえない、居心地の悪さ。

どうしよう……。

こんなことになるなんて……。

「ごめん。あたし、ちょっと……」

あたしは、ごまかすように笑うと、クラスメイトの壁をふらふらと通り抜ける。

「チヨコ！ ごめん」

肩を軽くつかまれて、バツの悪そうな顔のクラスメイトと目が合う。

「やだな。なんかちょっとムキになりすぎたみたい。あたしこそゴメンね」

謝りながらも、早く抜け出したい。

「私たち、ちょっと言い過ぎた」

暗い顔をするクラスメイトに、あたしは笑顔でこたえる。

「大丈夫だつて。本当、みんなの言うとおりだね。麻衣ってば、あたしになーんにも教えてくれないんだもん。ちょっとびつくりしちゃった。しかも相手は王子だもんね。お隣さんとはいえ、まったく接点ないからさ」。全然、気がつかなかった。それもこれもぜんぶ、アラシのせいだね。アイツがあたしの周りをウロチヨロするからさ、麻衣と女の子トークできないんだよね。本当、イヤになるよ。あたし、これからちょっとアラシのところに行ってガツンと言つてやるよ。邪魔すんなーってね」

そう言つと、あたしは教室から出た。

「なぐんだ、びつくりしたね」

教室の中から、小さく、安堵の声が聞こえると、あたしも少しホツとした。

よかった。

息をつくと、あたしはギュッと手を握り締める。

——ううん。

ちつとも、よくない。

この息苦しさは何？

すごく気持ち悪い。

あたし、イヤなの。

このままじゃいけないって思うのに。

何がいけないのか、何がしたいのか、全然わかんないの。

麻衣が好き。

麻衣が嫌い。

こんな風に、麻衣を想うのは初めて。

ずっと、ずっと、麻衣はあたしの味方だったのに。

なんでだろう。

麻衣は敵だって、今は思うの。

あたしは、早足で階段を駆け下りると、中庭へ出る通用口で立ち止まる。

ユキ……。

あんたなんて、大嫌いだよ。

あたしは、重たい通用口のドアを開けた。

12 キラキラ王子と噂の魔女（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。

（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

＋あとがきという名の懺悔＋

本日はありがとうございます。

誰も待つてはくれないだろうとは思いますが、

一応、完結は絶対させますので、そこんそこはお約束します！

今回、2ヶ月以上の赤字を見て、焦り、スピード仕上げしたチヨコボン。

8月になったら、少しは書けると思っていた小説が

やっぱり、いろんな行事やら、趣味やらで進みませんね。

書き始めると、あ！そうだったと

ちよっと、嬉しくなったり、苦しくなったりして書けるのですが書き出すまでが遅いので。

これだけの文字を生み出すのに、今回は4日くらいかかってます。実質、書いてる時間は2時間くらいなのに、書き出すまでに4日って……。

ブログにも書いたりしているんですが

最近、オンラインゲームをまたはじめちゃったんですよ。

本当、バカですよ。

今回も、絵を貼りました。

ユキちゃんとチヨコちゃんシヨット。

絵をもらえると、すごくやる気が増します。

さて次回

♪ 13

キラキライのお姫様

次回っていつなんだろう……という不安もありますが、
がんばって書きます。

もう2ヶ月赤字は見たくないですからね。

次回はチヨコちゃんと王子のからみでいこうと思います。

もう、いいかげん、気持ちに気づいてほしいものです。

王道、幼馴染ラブでいってるので、ベタですけどね。

がんばりまーす！

13 キライキライのお姫様（前書き）

書き直しましたー><
やっぱり、時間がなくて、ちょっと不安。

13 キライキライのお姫様

重たいドアをあけると、正午の日差しとはいえ、まだ2月の冷たさを含んだ空気が、髪を揺らした。

強い冷気に、あたしは目を細める。

ただ、外の空気に触れたかった。

「頭、冷やさなきゃ……どうかしてる」

ポタン。

ポタンッ。

「つめたっ」

見上げると、校舎から滴る雪解けの水が、額に落ちる。

昼休みも残りわずかだからなのか、中庭のアラシを含めた、男子生徒の姿はなかった。

さすがのアラシも、校舎に入ったんだ。

今なら、もしかしたら、恥ずかしさもなく、アラシの言葉を受け入れたのにな。

あたしは、弱気な自分に笑う。

「なんか、嫌な気分……」

吐く息が、少しだけ白く煙る。

あー、イヤだ。

何がイヤなのかも、わかんないってのが、すごくイヤ！

どんどん、小さくなってるような自分がいやになる。

何もしていないのに、この居心地の悪さは何？

そもそも、あたしが、弱気になる理由なんてない、よね？

あたしは、もう一度、空を見上げる。

嫌な気分になるのは、何でかな。

こんなに、胸が痛むのはなんでかな。

「教室、帰れるのかな……あたし」

なんだか、不安にもなってきた、あたしは、ガックリと肩を落とした。

どーして、あたしがこんな目に……。

そう思うと、怒りがふつふつと湧き起こる。

そもそも、アラシのせいで、みんなに変な誤解はされちゃうし。麻衣のせいで、あたしだけが親友だっと思ってた！ みたいに、可哀想な子になっちゃったし。

それに、ユキ。

麻衣があたしの友達だって知ってるのに、つきあってるって、一

言も言わないってどーいうこと？

「ちょっと、ヒドくない？」

独り言プラス、八つ当たりで、あたしは校舎を蹴る。

「いったっ！ 最悪」

足の指先から、痺れに似た痛みが、伝わってくる。

みんなして、ヒドいじゃん。

足の痛みは小さなもののなのに、目が潤んだ。

悔しい。

なんで。

なんでなのよ……。

みんなキライだよ。

アラシのバーカ……。

あんたなんて、絶対に、好きになんてなんないんだから。

あたしの事が好きだって言うなら、もっとさ、こっ、守るようにしろっての！

麻衣も麻衣だよ！

親友じゃんとか言って、コソコソとしちゃってさ。

ユキが好きなら、好きって言えばよかったじゃん。

なーにが、チヨコが一番大好き！ だよ。

もう、口きかないんだから。

「誰だって、怒るよ」

ふんっ！ と大きく息を鼻から出す。

誰だって、嫌な気分になるよ。

なんといっても、あの二重人格、凶悪王子でしょ！

最悪って何万回言っても足りないね！

お隣だからって何よ。

ユキはね！ 結局、あたしが悪いって言ってるけど――。

あ……。

あたしは、ハッとして、何か思い出しかけ、身体を硬直させた。

「あの時……、あたし……」

――ポタッ。

一滴の水が落ちると、あたしは白昼夢でもみているように、記憶を呼び起こした。

「嫌いって言ったら嫌い！ もう遊ばない！ もう絶交だよ！」

そう言ったのはあたし。

最初に「絶交」を持ち出したのは、確かに、あたしだった。

「チヨコちゃん！ 待って！」

後ろで、ユキがあたしを止めた。

だけど、あたしは止まらなかったし、振り返らなかった。
あの時は、何も聞きたくなくて、その場から逃げ出した。

—— ユキの言った言葉が、すごく怖かったから。

あれ？

ユキの言葉ってなんだっけ？

あれ？

スッポリ抜けてる……。

肝心なところが抜けてるなんて。

あたしは、苦笑する。

だって、問題はそれからなんだ。

いくら、あたしが「絶交」を持ち出したからって、そのまま、会わなくなるなんて、あたしだけのせいってのは、おかしいな。とは思ってたんだよね。

だから、今。

すごく、スッキリしたよ。

あれは、ユキが、会いにこなかったからだって思い出せたから。

その部分は、ハッキリと思い出せた。

あたしは、何度か、ユキの家に行った、呼んでも、ユキは部屋からでてこなかった。

だから、あたしは、ずっと待ってた。

「どうして……忘れてたんだろう。あたし、悪くないじゃん」

それから、あたしは、ユキを見かけることもなくて、避けられることが悲しくて。

気がついたら、あたしの隣は、ユキじゃなくて、麻衣がいつもいるようになってた。

「うわ……情けない。子供の頃の記憶って、残酷」

あたしは、声をだして笑った。

あたしが、ユキを遠ざけたんじゃないで、ユキがあたしを避けてたんだ。

可笑しい。

ずっと、待ってたなんて、悲惨。

今まで、ずっと忘れてしまっていた思い出だっというのに。

今更、こんなときに、追い討ちをかけなくてもいいと思うんだけど。

「やっと思いつけたのに、もう、忘れてもいいなんて……ね」

やっぱ、キライ。

ユキも、麻衣も、アラシも……。
あたし自身も。

ピロピロピロリン♪

ポケットの中で、突然、携帯になる。

そつと、携帯を取り出すと、待ちつけには「鬼教官」とでている。

「ユキ……」

あたしは、躊躇いながら、通話ボタンを押した。

「もしもし？」

『おい、今、どこにいる？』

ユキの声は、慌てているように聞こえた。

「なんで？」

『いいから、答えろよ』

「やだ」

『は？』

「だから、ヤダって言ったの。会いたくない」

ユキが無言になる。

「今は誰とも会いたくないから」

会いたくない。

会いたくない。

会いたい。

会いたくない。

ユキには、会いたくない。

あたしが、ずっと、待ってたなんて、そんなの……忘れてしまっていたほうが良かった。

「ユキ？ 聞いている？ もう、切るよ？」

無言のまま、ユキは通話状態を保っていた。

『どこにいるんだよ』

低い声が、小さく聞こえる。

こういう時、幼馴染っていうのは、厄介だ。

声色ひとつで、どんな状態かわかってしまう。

何か、すごく、思いつめている？

麻衣のこと、言い出そうとしてるの？

あたしは、携帯を耳にあてたまま、冷えた身体をさすった。

「……何か用なの？」

『……』

あたしの問いに、ユキは答えなかった。

「なんか……こーいうの、懐かしいね。昔もさ、こんな無言電話、ずっと聞いてたような気がする」

『……』

「昼間のうちに計画してさ、こっそり電話してたよね。たいてい、途中で二人で寝ちゃったけど」

『……次の日は、怒られたな』

「うん。なつかしい」

『チヨコちゃん……』

「ねえ、ユキ」

確認したら、もっと嫌な気分になるかもしれない。

だけど、聞かないでいたら、もっと嫌な気分かもしれない。

それに、今のユキなら、もしかしたら。

本当の事がきけるような気がした。

あたしは、そっと深呼吸する。

「どうして、あの時……会いにきてくれなかったの？」

突然で、意味が通じないかもしれない。

通じたとしても、今更な話だって、またバカにされる。そう思った。

『憶えてるのか？』

ユキは優しい声で、聞き返す。

「え？」

『忘れてると思ってた。あー、今更だって、笑うなよな』

「笑ったのはそっちじゃない」

『そうだっけ？』

ユキは、笑いまじりに話し出す。

『あの時、オレ……何度も行った。だけど、嫌われてたからな、押しかけるのは迷惑なんじゃないかって思ったんだよ。だから、何度も行っただけど、その度に、帰ってきたんだ』

「来てた……の？」

『今更、昔の話だなんて、少しも思っていないからな。オレは、忘れてないから……まあ、嫌われてたら意味ないけど』

嫌ってなんかない。

そんなこと……思っていないよ。

あたしの方が、嫌われてると思ってたから。

こっこの……すごく……変だけど。

『ずっと、許してもらえるチャンスがうかがってたんだ。だから……家庭教師はチャンスだと思ってた』

「バカにしてたじゃん。あたしが、昔の話すると、バカにして」

『すっかり、何もかも忘れてるみたいだったし。しかも、突然、何もかも忘れて、幼馴染に戻ろうなんて、何もなかったことにしようとして。面白くなかったんだよ』

ユキの拗ねたような声に、あたしは笑った。

「そっか。なーんだ嫌われてたわけじゃないんだ」

『なーんだって。それより、どこにいるんだよ』

「教えない。麻衣とのこと、黙ってたから、また絶交だよ！」

『なっ！』

「はい、じゃあ、バイバイ」

あたしは、携帯の電源を落とす。

忘れてないから。

ユキの言葉が胸に残る。

どうしてかな？

胸がドキドキしてる。

あたし、嬉しいんだ。

何年ぶりだろう。

こんな懐かしい感じ。

いつも、あたしの隣には、ふわふわのお姫様がいた。
お姫様は王子様になっちゃった。

でも何も変わらない。

それが、嬉しい。

「ユキも、麻衣も、アラシも。みんな、絶交！」

あたしは、携帯を握り締めながら、校舎の壁に背中をつけて、笑った。

13 キライキライのお姫様（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。

（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

†あとかきという名の懺悔†

たびたび、こんばんわーです！ 本日もご来場ありがとうございます。
ます。

書き直してます。

なんだか、足りないとかクレームがきたので、ちょっと話を急いで
書き直しました。

確かに、自分でも、何かおかしいとは思っていたので、これでよ
かったんだと思います。

書き直す前を読まれた方にはご迷惑をおかけいたします。

こちらが、本当の13話になります。

さて次回♪ 14 魔法がとける時間

やっぱり、電話じゃダメでしょう。

王子とのからみ、チヨコちゃんの気持ちの変化。
少しずつ、あせらないで！ と忠告されたので
ゆっくり書きます。

あせって、おかしなお話になるのも悲しいので。

でわ！ 次回でまたお会いしましょう♪

14 魔法がとける時間（前書き）

ちよつと時間がなさすぎです……
がんばります。

14 魔法がとける時間

もうすぐ春、だもんね。

あたし、結構、好きなんだけどな……。

一人で、校舎にもたれかかりながら、空を見上げた。
屋根から、はみ出した溶けかけの雪が、雨のようにしずくを落とす。

「雪……」

ただのひとりごとはずだった。

だって、ここにいるのは、あたしだけだと思っていたから。

「——何？」

「え……？」

空耳かと思うほど、微かに聞こえる声。

振り返ると、そこには、ユキが立っていた。

まるで、お化けでも見るように、驚いた顔をしていて、それがマヌケな感じに見えた。

「なんでわかった？ 今、来たんだけど」

「し、知らないよ……」

ふたりとも、驚きのあまり、声がつまく出せていない。

さつきまで、電話越しに聞こえていたユキの声が、すぐそばにある。

会いたくないと思っていたユキが、目の前に立っていた。こうなつて、はじめて気がつく。

ユキの顔を見るだけで、胸が締めつけられる、この気持ち。

どうして、ここがわかった？

どうして、あたしを探すの？

どうして……。

聞きたいことはいっぱいあるような気がした。

「ユキ……なんで、ここにいるの？」

「なんでって……それは……話があるっていつか……」

「あたし、場所、教えてないよね」

静かに、ユキの顔をみつめる。

白くて細い輪郭に、くつきりとした目鼻。

あたしより、ずっと美人に見える。

不公平だよ。

ずっと、この顔が隣にあったから、あたしの美的感覚はレベル高すぎで、自分が嫌になるよ。

「廊下から見えたんだよ。そ、それより、今、呼んだら？ そっちこそ、何？」

「え？ ユキのこと？ 呼ばないよ？」

そう言って、あたしは、校舎から落ちてくる、水滴の音で「ああ」と続けた。

「雪だよ。ほら、上から溶けた雪が、水になって落ちてきたから」
空に向けて、指をさすと、ポタンと水滴が落ちてきた。

「あ、なるほどね。エスパーかと思ったけど、そういうわけか」

「何それ。テレビの見すぎ。ほら、あたし、もう教室戻りたいんだけど。昼休みが終わっちゃう」

急かすような、あたしの言葉に、ユキはぴくりと身体を反応させた。

「それに、あたし、絶交って言わなかった？ こーいうのはマズいし」

「マズい？」

「麻衣に悪いし。あたしとユキが幼馴染だって、知ってても、こんな誰もいない場所で会ってたら、コソコソしてるみたい。もう、あたしのことは無視していいから。今までだってそうだったんだから」

「本気で言ってるの？」

ゾクツとするような、ユキの強い声に、あたしはビクツと肩を震

わせる。

「それに、コソコソって何だよ」

「だから、誤解されるって話だよ。ユキだって困るでしょ」

「困る、ねえ？ どうせ、チヨコちゃんは、アイツに、誤解されたら困るんだろ？」

「アイツ？」

あたしは、首をかしげる。

「アイツって言ったら、あの頭の悪そうな男しかいないだろ」

「頭の悪そうになって……ヒドイ。アラシのこと言ってるの？」

あたしの口から、アラシの名前がでると、ユキはキレイな顔を強張らせる。

「きこうと思ってたんだけど。チヨコちゃんは、アイツの事……好きなのか？」

ユキの鋭い視線が、あたしを刺すように睨んでいた。

「な、何？ どうしちゃったの？ そんなこと、関係ないじゃん」

「関係ないって……。思い出したんじゃないのか？」

「思い出した？ 何を？」

ギクリとしながらも、あたしは平静を装った。

だって、まさか、ユキをずっと待ってたなんて、言いたくない。今さら、言っても、あたしたちは、もう昔とは違うから……。

「ああ、もしかして、さっきの電話の話？ お互い、誤解してたって事でしょ？ あたし、気にしてないから。大丈夫」

「違う！ また、そうやって、逃げるのかよ！ オレは！ ……」
アイツの事、好きなのかって聞いているんだよ」

ユキは、まるで、泣いてるみたいに、苦しそうに、繰り返し、聞いてくる。

それなのに、あたしは、麻衣との事を思うと、優しくなんてできなかった。

「か、関係ない！ あたしとアラシの問題でしょ！」

「イラつくんだよ！」

ユキの大きな声が、響く。

「や、やめてよ。大きな声ださないでよ」

あの時と同じだ。

——怖い。

「オレだって、怒るときもあるんだよ！」

「だから、やめてってば！」

「いつもニコニコしてたって、チョコちゃんは、わからないじゃないか！」

—— わからないよ、わかりたくない。

「聞けよ！」

そらした顔を、ユキが強引に、向きを変える。

目に飛び込む、ユキの目は、まるであの時と同じ……。

そう、あの時。

—— 嘘つき！ チョコちゃんの嘘つき！ ずっと……。

ずっと……。

ユキが叫ぶ声だけが、思い出された。

やだ。

何か、すごく思い出したくない気がする。

「思い出せよ！」

ユキの声で、ハッとする。

目の前の顔を見ると、何かがカチツと重なる。

ああ、そうだ。

あの時も、ユキは怒って、叫んだ。

—— だけど—— 本当は……。

だめ！

怒ってなんか。

やめて！

—— そう、本当は怒ってなんかなかった。

やだ！

思い出したくないの！

心がふたつになったような、おかしい気分だった。

思い出したい。

思い出したくない。

どちらもあたしの気持ちだった。

思い出そうよ、それでスッキリできるなら……。

あたしは、抵抗する自分を抑えて、思い出をたどる。

そうだ、おぼえてるよ。

今みたいに、怒りながら、それでいて、泣きそうなユキに気がついて、あたしは逃げたんだ。

あたしは逃げ出した……。

目の前のユキと、小さなユキを重ねながら、あたしは記憶の扉を一枚ずつ開けていた。

「本当、イラつくんだよ……頼むから……もう、こんなの」

悔しそうに、苦しそうに、ユキの綺麗な顔が、歪む。

そして、ユキの手が、ゆっくりと、あたしへ伸びる。

ユキは知らないでしょ？

あたし、ずっと懂れてたんだよ。

小さなあたしのお姫様は、キラキラの王子様。

いつでも守ると言っていた騎士のあたしは、本当はお姫様になりたかった。

だから、ユキが王子様だって知って、本当は嬉しかった。

これで、あたしがお姫様になれるって……。

そう、今みたいに、大人になった王子様のユキが、あたしをお姫様に変えてくれるんじゃないかって夢みてた。

でも、あたしはお姫様になんか、なれなかった。
怖かったもん。

いつか、もつと素敵なお姫様が現れて、あたしはいらなくなっちゃう。

だから、考えたの。

もしも、あたしが騎士のままでいたなら？

ユキがあたしにとって、本当のお姫様だったら？

そしたら、ずっと仲良しでいられるでしょ。

あたし、怖かったから、ユキをお姫様のままにしたの。

結局、それだって上手くいかなかった。

でも、今は思うの。

ユキが王子様でも、あたしが騎士をやめても、仲良しでいられたのかな？

あたしは、間違えちゃったのかなって。

今にも泣き出しそうなユキを、受け入れるように、あたしは、動かないでいた。

細くて長いユキの指先が、あたしの頬にツツと触れる。

その瞬間。

麻衣の顔が、目に浮かんだ。

「やっ！」

思わず、ユキの手を払い、あたしは一步、後ずさる。

「チヨコちゃん？」

「ダメだよ。なんで……ユキは、麻衣とつきあってるんでしょ！麻衣が悲しむよ。あたしの事は、もう、ほっというてよ！ □ださ

ないで！」

「な！」

「だって、そうでしょ？ ユキだって、あたしに何も言わないで、麻衣と、つきあってる……」

声が自然と力をなくす。

嫌な感じが身体を重くさせた。

もう、戻れない。

子供じゃないから。

ユキはあたしの王子様なんかじゃないから。

ユキは麻衣の王子様だから。

バカなあたし。

それこそ、今さらなお話。

もしも……なんて、それこそおとぎ話でしかない。

それに、お似合いだから。

本当に、すぐくお似合いな二人だから。

美しいお姫様に、王子様。

まさに、ぴったり。

あたしが、麻衣みたいな美人だったら、ユキのお姫様になれたのかな？

あたしは、その先を考えたくなくて、首を思い切り振った。

「もー！ ヤダ！ こんなのおかしいよ。もう、やめにしよう」

そう言って、ユキの顔を見上げた。

「ね！」

「……また、そうやって逃げる。いつもそうだよ……チョコちゃんさ、逃げるんだよね」

低くて、それでいて悲しいくらいに、切ないユキの声が、あたしの身体を硬直させた。

ユキの視線は、真剣だった。

「チョコちゃんは、いつだって、フラフラして、ちっとも気づかないんだ」

「フラフラって何よ！」

「気づいてないと思う？ いつも逃げてただろ？ オレから、ずっと逃げてるだろ？ 何が怖いのか？ オレ？」

「バ、バカじゃないの！」

「バカは、そっちだろ」

苦しそくに、ユキが笑う。

「……喧嘩、売ってるわけ？」

あたしは、低く呟く。

これ以上、話したくない。

これ以上、聞いちゃダメ。

そんな予感がした。

「いい加減、思い出せよ。お願いだから」

「な、何をよ！ 思い出したら何だっていうの？」

耳を塞いで、目を隠して、すべてのアンテナをオフにして、逃げ出したかった。

ユキをどう想っていたかとか、あたしがどうなりたかったかとか、そんなの関係ない。

だって、もうユキはあたしのお姫様でも、王子様でも、ただの幼馴染でもないんだから。

だから、もう、何も言わないで。

祈るように、あたしは、ユキを見上げた。

「あの日、オレが言ったこと、思い出せよ」

「あの日っていつ？ ユキの言ってることがわかんない」

「あの日は、あの日！ お前が、絶交だって叫んだ日だよ！」

「思い出したよ。ほかに何かあるの？」

「っざけんな！」

ユキの目が、見開いて、怒りが頂点にきているのがわかった。

あたしは、なんとか逃げ出そうと、ユキの隙をついて、ドアに手をかけた。

「待てよ！」

強く引つ張られる腕を、慌てて引きぬくと、あたしは急いでドアを開ける。

「触らないで！ わかんないよ。思い出してないこともあるかもしれない。だけど、全部、思い出したって……何も変わらないですよ」

「チヨコちゃんは、何も変わらないって言うけど、何を変えたいの？」

「あ、あたしは……別に……」

ドアを開けたまま、あたしは立ち止まる。

「オレは……オレは、変えたいよ。ずっと、そう思って待ってたんだからな」

「待ってたって……待ってたのは、ユキなんかじゃない！」

あたしは、恐ろしいくらいに睨むユキに背をむけると、教室に向けて、走り出した。

「千代子！ 逃げるな！」

ユキの声が、廊下に響いた。

それでも、あたしは止まらないで走った。

あたしを変えたいもの。

あたしが待ってたもの。

全部、もう、わかってる。

でも、どうにもできないじゃない……。

ユキが変えたいものって、幼馴染っていう都合のいい関係でしょ。そんなもの、あたしは……欲しくない。

麻衣のための幼馴染。

あたしのためじゃない。

何も変わらない。

ユキは麻衣が好きで、お似合いの二人で。

アラシはあたしを必要としてくれる。

何も、変わらない。

「思い出すって……何」

あの日。

ユキは大きな声であたしに叫んでいた。

『嘘つき！ チョコちゃんの嘘つき！ ずっと……』

教室の入り口までくると、あたしは立ち止まる。

「あ……」

記憶の中で、小さなユキが泣きながら叫ぶ声がする。

どうして、ずっと忘れていたんだろう……。

あたしは、口を押さえて、声を殺しながら、うずくまった。

「ずっと……一緒に……約束」

ポロポロと、途切れ途切れに、言葉が溢れた。

そうだ、約束。

ユキと、約束。

『ずっと一緒だって約束したのに！ チョコちゃん！ チョコちゃん！ 待って！ 僕、チョコちゃんのことを好きなんだ！ チョコちゃん！』

「好き……」

昔の事。

思い出したくなかったのは、怖かったから？

怖い気持ちと、恥ずかしい気持ちの区別もつかなかった幼いあたしが恥ずかしかったから？。

あの時、突然の告白を受けとめられるほど、あたしは大人じゃなくて。

ユキを遠ざけた。

誰よりも、大切に想っていたユキからの告白。

ありがとう、あたしも、ユキが大好き。

たったそれだけのことが、言えなかった。

「バカみたい……」

あたしはユキのお姫様だったのに。
自分で放棄したんだ。

「チヨコ？ な！ どうして泣いてるのよ！」

「麻衣……」

教室の入り口で、うずくまったまま。
あたしは、泣いていた。

「どうしたの？ 何かあったの？」

「なにも……なにもない」

「チヨコ？」

「ごめんね。ごめん、麻衣……。大丈夫」

麻衣は、あたしの肩を抱いてくれて、それ以上、何も聞かなかった。

あたしはただ、底なし沼にでも沈んでいくような感覚をおぼえていた。

14 魔法がとける時間（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。
（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

＋あとかきという名の懺悔＋

お久しぶりーのご来場、ありがとうございます！
なんだか、急展開させましたよ！

しかし、ベタですよね。

ちよつと、もう我慢できん！　みたいなユキくんとか
わけわからん！　みたなチヨコちゃんを書く回だったわけですよ。
あらずじノートにはそれしか書いてなかった……。

好きなものを、好きなように、好きなときに書けるって幸せですね。

その分、完成度は下がるんでしょうが、表現とか、言葉とか、自由ですからね。

ホクホクですよ

それに、やつと、恋愛要素でできそうで、ホツとします。

やつぱり、両思いな感じの甘々が、書きたい気分。
書けるときに書かねば！デス。

さて次回♪

15

騎士に奪われる

次回は、アラシ君とチヨコちゃん。

あれですね。

実は、アラシ君のほうが好きなんです。

明るいバカは大好きです。

あとは、王子がもう少し、やわらかくなってくれと萌えなんですよね。

いつになることやら……。

でわ！ 次回でまたお会いしましょう♪

15 騎士に奪われる（前書き）

赤字、でてましたね……。

がんばらねば！

HP作成で、ちょっと疲労ぎみですが、がんばります！

15 騎士に奪われる

——そして、魔法はとけて、お姫様と王子様は幸せになりました。

魔法がとけて、すべてが上手くいくのは、絵本の中だけのこと。
現実には、そんなに簡単にはいかない。

あたしを取り戻せたものは、長い間、忘れかけていた、幼い頃の
曖昧で残酷な約束。

チヨコちゃんとユキは、ずっと一緒なんだよね。
ユキは、チヨコちゃんが一緒なら、いいの。

チヨコちゃんは、ユキの事、好き？

ずっと、ずっと、一緒ね。約束だよ。

断片的な記憶が、溢れ出す。
まるで、もう止める事ができなくなった水の氾濫の様に。

「最低……なのは、あたし……か」

あたしは、椅子に座ったまま、クラスメイトもまばらになった教室から動かないでいた。

あたしだけ、ずっと忘れて、ユキから逃げてきた。
ユキが離れてしまった理由も、何も考えなかった。
あたしは、眠るように目を閉じて、何も見なかった。

そして、忘れた。

ユキを好きだったことも、好きだと言われたことも。そうやって、あたしは自分を守って、ユキをひとりぼっちにさせた。

その間、ユキは、きっとあたしを恨んだ。ううん、ユキは恨んだりしない。

ユキは、きつと泣いてたんだ……。

それなのに、あたしは……。

「おい。どした？」

「……アラシ」

聞きなれた声の方を見ると、笑顔のアラシが立っていた。

「元気ねーな」

「そ、そんなこと、ないよ」

「麻衣は？ ケンカでもした？」

「麻衣」という名前に、あたしの身体が、一瞬だけ、小刻みに震えた。

「麻衣は……」

そういえば、麻衣がいなかった。いつもは、忘れ物はないかとか、用事はないかとか、細かくチエ

ツクしてくるのに、今日は、いなかった。

「帰ったの、かな？」

たぶん、ユキのところ。

そう言いたかったけど、胸が痛んだ。

「へー、めずらしい事もあるんだな」

「そうだよね……。あ、でも。麻衣にもいろいろあるみたいだから」

あたしが、少しだけ笑うと、アラシは不思議そうに首をかしげた。

「なーに？　そういう風に、人の気持ちを覗いてるみたいな目で見ないで。ほら、今のうちに、帰るんでしょ？」

椅子から立ち上がると、カバンを持ち、アラシを見上げた。

「アラシ？」

まだ、じつと、あたしを見つめるアラシに、問いかける。

「お？　おう。帰る、帰る」

何？

変な間があったような……。

いつものアラシなら、ふざけて強引に手でも握ってきそうなのに。

「あ！もしかして緊張してるのか？」

あたしは、鼻を鳴らして、横目でアラシをからかう。

「ばっ！ そんなんじゃねーよ！」

「やだ、凶星？ らしくないっての」

あたしはケラケラと笑った。

アラシの緊張がおかしくて、胸の痛みが少しだけ和らいだような感じがした。

「なんだよ、ソレ。オレだって男子なわけだよ？」

「わかってるっての。だって、アラシって、結構、人気あるっばいよ」

あたしは、小さく笑うと、アラシの横をすり抜けた。

「なんだ？ 今頃、気づいたのかよ。なんか、スッゲー悲しいんですけど」

「あたし、今まで、何も見てなかったしね。本当、バカでしょ」

振り向きながら、アラシに言う。

アラシは優しく微笑むと、あたしに近づく。

「そんな泣きそうな顔すんなって……そっちこそ、らしくねーよ」

「や、やだな。泣きそう？　あたしが？　気のせいでしょう？　そんな顔してないって」

そう言っただけで笑ったつもりだった。

それなのに、なんでかな、上手く笑えない。目が熱くなる。

「チヨコ？」

優しい声が、あたしの目の前へおりてくる。

いつの間にか、アラシは前かがみになって、あたしの顔をのぞきこんでいた。

「あ！　あたし、ちょっとトイレ！　玄関で待っててよ。すぐ行くから！」

今にも涙が溢れそうな目を、ぎゅっと閉じる。

「ばっ！」

逃げ出そうとする、あたしの腕を、強い力が引きとめる。

「か！」

強い口調のアラシの声と一緒に、あたしの身体は振り回されるように、くると半回転。

そして、すっぽりと、アラシの腕の中に納まる。

「や、やだ……離して。ジョ、ジョーダンでしょ……」

アラシの胸の感触。
初めての胸の高鳴り。

誰もいない教室で、アラシに抱きしめられるように、向かい合う。
遠くから聞こえる、小さな声でさえも、耳がひろってしまふ。

規則正しく動く時計の音と、あたしの心臓の音が強く響いていた。

「オレ、本気だから。受験、終わったら、ちゃんと言うつもりだったから」

「ちゃんとつて」

「アイツの事、気になってるだろ？　ただのお隣さんじゃないことなんて、わかってるんだよ」

それって……ユキのこと？

「いきなり出てきて、何なんだよ……」

「それは！」

顔を上げると、アラシがあたしを切なく見つめる。
そんなアラシを見るのは初めてだった。

「アラシ……」

「オレ……アイツになんかわたさない」

その顔が、その声が、胸に突き刺さる。

この展開を期待していた。

告白されて、彼氏ができるのを、どこかで夢みてた。
アラシならって、どこかで待ってた。

期待させて、離さなかった。

それなのに……。

あたし、今、この腕から逃げたい。

今さら、怖いなんて……。

このまま、流されて、あたしはどこへ行くの？
この腕から逃げて、あたしは、どこに行くの？

ユキ、あたし、どこで間違えたのかな？

どんどん、離れていくような気がするの。

もう、戻れないって、痛いくらいにわかるよ。

ユキも同じだった？

麻衣を選んだとき、ユキも同じように思ってくれた？
ひどいね。

そんな、調子のいいこと考えちゃうなんて。

本当、あたしって、お姫様じゃなくて魔女だね。

でも……それでもね。

そう想ってくれたらいいなって、思うの。

ユキも同じように、あたしを想ってくれたって。

だって、小さなあたしが、泣いちゃいそうだから。
お姫様だった頃のあたしが……。

「チヨコ、一緒に高校、行くよな」

祈るように、強く願う声。

同じ。

あの時の幼いユキと、今のアラシは同じに見えた。

あたしは望まれてる。

突き放せば、壊れてしまう。

もう二度と、この優しさはあたしのものじゃなくなっちゃうんだ。
今ならそれがわかる。

それなら……。

「うん……一緒に」

あの頃、答えられなかった言葉。
今なら、言える。

ごめんね。

胸の中で、あたしはくりかえす。

ごめんね、小さなあたし。

「アラシと……一緒に」

ユキを好きなのは、小さな頃のあたし。
ずっと、王子様を待ってた、幼いあたし。

だから、大丈夫。

あたしの王子様は、ちゃんとここにいるから。

今のあたしの好きな人。

「チヨコ……」

「ア、アラ……——ッ!!」

声を出すより先に、あたしの口がふさがれる。

目の前に、アラシの長いまつげが見えて、あたしは目を見開くことしかできない。

こっ！

これって！

そう思った瞬間、大きく、教室のドアが開く音が響く。

その音に反応して、あたしとアラシは咄嗟に身体を離れた。

「やべっ……」

「ユ、ユキ？」

ユキの顔が、ゆがむ。

「お前……」

「うそでしょ、チヨコ……」

口を押さえて、驚く麻衣と、今にも爆発しそうなユキが、あたし

とアラシを睨む。

うそ……見られた。

なんで、なんで、二人が。

「クソッ！　なんでっ！」

「ユキ君っ！　待って！」

「葛城っ！　離せよ！　アイツっ！」

「ユキ君っ！　ダメっ！　きゃっ！」

ユキは麻衣を押しつけて、アラシめがけて走る。

「麻衣！　大丈夫！？　ちよっ、ちよっと！　ユキ？」

様子のおかしいユキに、あたしも駆け寄る。

ユキの目には、アラシしか見えていないみたい、まっすぐに向かっている。

まずい。

ユキ、何も見えてないみたい。

ユキがケンカなんて、しかもアラシと。

そんなの絶対、勝てっこないよ。

だって、アラシは部活はサッカーだけど、空手道場に通ってるんだよ！

いくらユキでも、絶対にケガしちゃうよ！

「や、やめて！　ケンカはだっ、だめっ！」

どこをどう入ったのか、あたしはユキとアラシの間にわりこむ。
次の瞬間、ユキの振り上げた拳が、あたしに向かってくるのがス
ローモーションで見えた。

「ぶひっ！」

「キヤーッ！ チョコッ！」

麻衣の悲鳴と同時に、あたしの身体は真横へ飛ばされ、近くにあ
った机にぶつかった。

「チョコッ！」

「チョコ……」

アラシとユキの声も聞こえた。

なんで、こんな事になってんの……。
なんで、あたしが、ユキに殴られて、飛ばされてるわけ？

ああ、もう、本当。

あたし、呪われてるのかな……。

遠くなる意識の中で、あたしはユキの声だけを探していた。

ごめんね、ユキ。

守ってあげられなかった。

うつすらと見える視界に、ユキの顔が見える。

必死で、悲しそうに唇を噛む顔に、胸が痛んだ。

ほら、泣いちゃダメ。

ユキは、男の子なんだから……。

ユキはあたしの王子様なんだから……。

昔も、今も。

だから、泣かないで。

ね、ユキ。

15 騎士に奪われる（後書き）

下にあとがきと次回予告がひっそりとあります。

（あとがきパスな方用に見えないようにしています。）

†あとがきという名の懺悔†

いつもご来場ありがとうございます。

しかも、この最後まで。

なんとか、ここまでできました。

もう終わりますね。

本当、終わらせてつくらざるズルです。
がんばって書きます。

あとがきも書く時間がないくらい、生活におわれています。
それでも、少しでも、誰かと繋がっていたいので
書いていこうと思ってます。

変な文章……。

いろいろと考えるところがあつて、少し悩み中です。
それで、カタコトみたいな文章になってます。

また次はいつになるかわかりませんが
続きをかいていきますね。

HPを新設したので、よろしかったら遊びにきてください。
まだチョコボンまでは手がつけられていませんが。
日々、成長しているとは思います！

さて次回 ♪ 16 魔女の願い

そろそろ、意地悪しないで、素直に書きますね。

王道ラブですので、ベタですが、安心して読んでいただけます。

でわ！ 次回でまたお会いしましょう ♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6554d/>

ボンボン=ショコラ♪

2010年10月10日00時14分発行